

つばめ農園
おひさま便り
中国山地に抱かれて

阿東つばめ農園・生物文化多様性研究所編

ごあいさつ

阿東^{あとう}つばめ農園は、津和野にほど近い山口市の北部の徳佐^{とくさ}にある小さな農園です。中国山地の中の、標高 300 メートルほどの広々した高原を見下ろす山裾にあります。ここで長男の安溪大慧^{あんけいだいえ}（1983 年生まれ）を中心に、農薬も除草剤も化学肥料も使わないで、お米と大豆を家族農業で作り始めたのは 2012 年のことでした。畑は、1990 年から、また自家用の米は 1993 年から育ててきましたが、販売農家になったのは初めてで、いろいろ試行錯誤を続けています。幸い「阿東ゆうきの会」という小さな仲間ができて、互いに励まし合いながら進めています。

2019 年に、農場の上に藤棚のように隙間を開けてソーラーパネルを並べる、ソーラーシェアリング（営農型太陽光発電）を山口県で初めて導入して、「おひさま発電所」と名づけました。この取り組みで、経営はやや安定して、将来の計画も考えられるようになりましたので、山口市の「空き家×交流」の補助金をいただいて、近くの空き家を改装し「おひさま交流館」と名付けました。遊地と貴子は、もともと大学などで文化人類学や生物学を教えてきていることもあって、これから大切になるものはなんだろうと考えて「生物文化多様性研究所 Institute for Biocultural Diversity」という、私設研究所の看板を掲げました。

この冊子は、そうした「有機農業×発電+交流×研究」が混然とした、わたしたちの地域での日常を綴ったものです。京都でロシナンテ社が出している雑誌『月刊むすぶ』に連載させていただいている内容を、ページ数もふくめてそのままに再現し、2020 年 1 月から 2023 年 1 月分（588～623 号）の集成版としてお届けするものです。ちょうど新型コロナ肺炎の流行と重なってしまい、おひさま交流館で毎月一度は集まってわいわい未来会議をしたい、という計画は延期していますが、それでも、思い切り息をしたり、大声で叫んだりしてもいいのは、田舎のよいところです。毎回読み切りの形で書いていますから、どこから読んでいただいてもかまいません。いろいろ錯綜した内容の手がかりになることを願って、巻末に索引をつけておきました。

前身の『地域闘争』の時代から数えればもう 50 年を越えた『月刊むすぶ』の編集と発行の継続は、コロナ禍の中でのしかた・さとさんの献身的な働きで可能になっているものです。<https://www9.big.or.jp/~musub/index2.html>から、『月刊むすぶ』の定期購読をお勧めします。これからも連載と応援を続けます。

ひごろのご無沙汰のお詫びと、生存確認を兼ねて知り合いのみなさまにお届けいたします。どうぞお気軽に遊びにいらしてください。



2023 年新春

阿東つばめ農園・おひさま発電所・おひさま交流館・生物文化多様性研究所
安溪大慧・貴子・遊地



つばめ農園おひさま便り

1

安溪貴子・安溪遊地

プロフィール

安溪貴子

農業のかたわら、生態学・民族生物学を研究。微生物研究で理学博士。山口県内の大学や看護学校で生物学・文化人類学の非常勤講師。主な著作に『森の人との対話』（東京外大 AA 研）、『ソテツをみなおす』（ポーターインク）など。

安溪遊地

農業のかたわら、人類学・地域学を研究。アフリカの物々交換研究で京大理博。山口県立大学名誉教授。山口県内の大学や専門学校で文化人類学・地域学を教える。主な著作に宮本常一との共著で『調査されるという迷惑』（みずのわ出版）など。



阿東つばめ農園の3人
2016年11月20日、下瀬一正さん撮影

二〇一二年、山口市最北部の阿東（あとう）に引越しました。田んぼつきの古民家を買って……。西表島やアフリカ、フランス、スペインなどを巡り歩いてきた私たちの、日々の暮らしと思いをお届けします。

つばめ農園のはじまりと福島事故

「確かな人に渡してほしいという家と田畑があるんだ。来てくれたらうれしい、いっしょに農業をしよう」——知人の言葉です。でも、そこから五〇キロ離れた山村に家を建てて住んでいましたから迷っていました。田舎に住んでまわりの自然や人びとから学びながら農的暮らしをしたい、そう思っただけに入った山村だったので、ここでは十数年借りてきた小さな田んぼを返せと言われていたのです。

そこに福島原発震災が起きました。農業ができなくなった被災者の方々が農業で暮らせる場所が要るに違いない。そんな方々とともに農業ができる場所があれば、と思ったのです。当時遊地が勤めていた山口県立大学の研究室に訪ねてくる学生のなかにも福島県の有機農家の人がいました。

こうして震災に背中を押されて農地を買う決断をしました。いろいろな農家を手伝ったことがある息子が「有機農業をやってもいい」と言ったのも確かな一歩になりました。

四月、農作業を始めるのに合わせて阿東の家に暮らし始めるとツバメがやってきました。目の前の田んぼの藁

と泥をすくって家の軒下に巢造りを始めたのです。私たちが家に出入りしても恐れません。「ツバメって、田んぼから巢の材料をとっているんだ。人が確かに住んでいるとわかったから来たんだね」。ツバメたちの求愛のにぎやかな鳴き声を聞きながら、ツバメと稲作との二〇〇〇年以上に及ぶ深い関係にあらためて気づかされたのでした。

農薬や化学肥料を使わない、環境に配慮した農業をする。できるだけ地域での循環を大事にした持続可能な暮らしも視野に入りたい。そんな目標をもって、少しずつ教わりながら、ここで自給できる物は自分でつくってみたい。これが当面の目標になりました。

わが家の稲作の歴史は、一九九三年に始まりました。当時鳥取大学の農学部長だった津野幸人（ゆきんど）先生のところへ山口大学から内地留学をさせていたでいて、大山の麓の村に住みました。そこで、先生と大学院生のみなさんの手ほどきで初めて田んぼを作ったのです。おりしも日本の稲が不作でタイ米の輸入を余儀なくされた年でした。山口に戻ってからも、家族で食べる程度のお米がいただける田んぼを作り続けました。農薬も除草剤も化学肥料も使わず、津野先生考案の「再生紙マルチ」を敷いて

田の草を押さえる農法が出発点でした。山口でも田んぼのある暮らしに切り替えようと、田舎に移住しました。籾を蒔いて苗を作ることをご近所に教わり、稲刈りも稲束を竹に掛ける「はぜ掛け」でした。ですから、農薬や化学肥料を使う慣行稲作をやったことがないことをここで白状しておきます。

家族で食べるだけの田を毎年作りながら、津野先生に教えられて「山口県環境保全型農業推進研究会（通称山口かんぼ研）」に入りました。この集りで、主に山口県内の環境保全型の農業をする方々と出会うことができ、教わりながら二〇数年、今日に至っています。

アフリカで聞いた原発の闇

話は飛ぶのですが、大山の麓の村で暮らしていた時、私たちがはじめての稲作への挑戦をわざわざ東京から見に来た人がありました。当時、通産省の外郭団体に勤めていたAさんです。彼とは、アフリカでたまにたま出会って以来、手紙のやり取りをしていました。「これからの時代の最先端は何でしょう?」と問われたので、津野幸人『小農本論——誰が地球を守ったか』（農文協、一九九一年一月）を踏まえて「持続可能な

小さな農業では」と答えたのでした。以下は、一九九〇年にアフリカで初めて会った時、食事に誘われて聞いたAさんの話です。日本の老朽原発は、津波以前に、そもそも上下に揺れる地震に耐える基本設計ではなかったのです。

——（遊地）アフリカで仕事をされる以前は何をしておられたんですか？

実は、私は、原子力産業で働いていました。炉心部分の基本設計をしていました。でも、私が設計にたずさわった一九七〇年代には、耐震設計は、水平方向のX軸とY軸だけを考慮していて、上下方向のZ軸については、そもそも考慮していませんでした。

——ということは、もしも直下型の地震があつて上下方向に動くことがあつたら？

やばいですね。

——ええ!? やばいんですか？ それも今も稼働している!?

はい。それから、立場上いろんなファイルを見ることがありましたが、その中に福島原子力発電所に納める圧力容器、原子炉を格納する一番大切な鋼鉄の巨大な容器、これを船から海に落としてしまった、ということが書かれています。何百トンもあるものを引き上げてみたら、まん丸でなくて歪んでしまっていたんです。でも、作り

直していたのでは納期に間に合わないし、会社に莫大な損失が出ます。仕方なく、中に大型ジャッキを入れて歪みをなおしたという内容でした。

——そ、それって、やばくないですか？

設計の強度がたもてますか？（バブコック日立の社員として福島第一原発四号炉用の压力容器の「修正」作業にたずさわった田中三彦さんが『原発はなぜ危険か——元設計技師の証言』（岩波新書、一九九〇年一月）に書いておられる内容と符合するお話ですが、私たちはまだ読んでいませんでした）。うーん、やばいですね。

——それを政府は見過ごしてしまっただけですか？

そのあとしばらく、この压力容器を納入した業者には、通産省は原発関係の入札をさせませんでした。

——それだけですか？

それだけです。

——なんか納得がいきませんか。

はい。いろいろ納得のいかないことがあるなかで、ある日のこと、私はまだ稼働していない原子炉の中に入って、暗い迷路のような原子炉の中で迷って出られなくなってしまうんです。手探りで出口を探しながら、

「出口がない、

出口がない、

出口がない、

ない！！」

私は原子炉の中でパニックを起こしてしまいました。それがきっかけであの仕事をやめたんです。——あなたが設計された原子炉たちは、大丈夫なんですか。

さつきも申し上げたように、やばいんです。出口がないんです。だからぼくはこうしてアフリカに來てるんじゃないですか。（つづく）

（あんけいたかこ・

あんけいゆうじ）

y@ankei.jp

 <http://ankei.jp>

ロシナンテ社へ寄付金を！



少し遅くなりましたが・・・新年あけましておめでとうございます。

いつもお世話になっています。本当にありがとうございます。

ロシナンテ社はこの夏、50周年です。私たちのもう一つのネットワークとして、月刊地域闘争そして月刊むすぶを出し続けてきました。

住民運動、市民運動の発信のお手伝いを担ってきました。それなりの仕事ができただけと思っています。

でもこの半世紀、本当に貧乏な会社のままです。

私、しかたは、この会社で働くことで、本当にいろいろな経験をさせていただきました。私たちは、声を出すことで主権者足りうるだと理解しました。だからこそ今日までロシナンテ社は、歩んでくることができました。私たち、力のないものが、あの人たちと闘う場、文化がロシナンテ社なんだと思うんです。

こんな場を少しで前進させたい。

そんなロシナンテ社へ、寄付をお願い致します。

勝手なお願いだと重々、分かってはいます。それでも生き抜きたいのです。一口＝5万円。何卒、よろしくお願ひします。

▶入金先

みずほ銀行出町支店（普通）1305473

ロシナンテ社を支える会（共同代表 四方哲 吉田信吾 名出真一）





つばめ農園おひさま便り

2

安溪貴子・安溪遊地

田畑の準備

暖かい冬ですね。山口市最北端、津和野に近い阿東高原に住み始めてから8年、これまでには、ひと冬に二回くらい、三〇センチからときには一メートル近い雪が積まりました。家から出られず、お隣りが助け出しに来てくださったことや、雪の中のお正月で、野菜を畑から掘り出せなかったこともあります。しかしこの冬は雪が二度ほどちらついただけ、家の庭から望む中国山地も雪化粧をしないままの暖かい冬です。期間は短くても積雪に慣れた山の木々や田畑の作物が心配です。朝鮮半島から毎冬にやってくるミヤマガラスの群れも今年ほとんど見ません。それでも水路の掃除をしていたら、体長8センチのお腹が大きいアカガエルが産卵のためでしょうか、水辺でじっとしているのに出会いました。太陽が雲に隠れて気温が急に下がったので動けないのでしょうか。カラスに見つからないよう枯れ草をかけました。軒下に溝を掘っていてマムシの冬眠に出会ったこともあり。家の側で冬眠しているので驚きました。

そんな冬空のもので、春に始まる稲や大豆の田畑の準備をしています。畦草刈りや水路の点検、農用機械の整備、種まきの準備です。畑ではライ麦が芽を出していて「麦踏み」をしました。畑に残っているハクサイ・ダイコン・ニンジン・カブ・

タカナ・ミズナ・サトイモなどを収穫します。陽ざしが長くなるとこれらの野菜に花が咲きはじめるので、その前に収穫を急ぎます。ニンニクやタマネギの苗をポリマルチをして植えたのですが、マルチの隙間から芽を出したコハコベやアオミミナグサ、トゲミノキツネノボタン、ヒメオドリコソウがいつのまにか大きくなっていて、寒風のなか草取りをしました。そういえばどれもヨーロッパから来た外来種です。引き抜くと茎や葉よりも根っこがひろがっているのに驚きます。間もなくもこもこしたフキノトウが見つかるかも。

つばめ農園おひさま発電所

話は飛ぶのですが、つばめ農園では昨年の八月から「ソーラーシェアリング」を始めました。営農型太陽光発電とも言い、田んぼや畑にソーラーパネルをおいて、地上からの高さ二メートル以上を確保して、その下で農業をするという、二階建てで農地を利用する新しい方法です。

でも、Q1・なんでわざわざ農地に？ Q2・パネルの陰で作物が育つの？ Q3・台風に弱くない？ Q4・買い取り価格がどんどん下がってダメじゃない？ Q5・最後はリサイクルできないゴミになる？ Q6・原発もいやだけど再エネ賦課金が増えて納得いかない、など色々な疑問が浮かびます。



写真／ソーラーパネルの下の田んぼでの除草
乗用除草機と手押し除草機と手取りです。
岡本公一さん撮影。

百聞は一見にしかず。山口県にはないというので、先進地の千葉県に家族三人で見学に行きました。二〇一七年十二月のことです。三へくたールの荒廃農地に導入した匠磋（そうさ）市の事例や、一〇アール程度のブルーベリー畑で農家民宿と合わせて経営しておられる例など、いろいろなタイプの取り組みを見せてもらいました。規模は様々でしたがいずれの方も、導入して地域の未来についての展望が開けてきたという意見が共通していました。「若い世代が田舎で有機農家になるという高いハードルも、ソーラーシェアリングの助けがあれば、案外楽に越

えられて、結婚したり子どもを育てたりということも、視野に入ってくるのでは？」という言葉ももらって帰りました。それから実際に阿東つばめ農園に、山口県では初となるソーラーシェアリングを導入するまでとしてから二年ほどで経験したことを踏まえて、さきほどの疑問にお答えしてみよう。

A1・ソーラーシェアリングは、その下で農業を続けることが許可の条件。だから野立てのメガソーラーなどが直面している山の乱開発や、雑草に負けるという問題がありません。うちは機械にあわせて高さを三メートルにしました。

A2・パネルをスタレのように隙間を空けて並べます。遮光率は三分の一程度で、普通の作物なら何でも育ちます。植物が光合成には必要とする光は、強すぎても使いこなせず、稲の場合には約半分程度しか使っていません。

A3・一本が一トン以上の引き抜きに耐える巨大な釘のような土台に設置した丈夫なもので、万一に備えて保険も掛けています。

A4・買い取り価格は設置の単価がほとんど下がるのに合わせて下がっています。うちは、二〇年間の固定価格買い取りで、一〇年ちよつとで元がとれる予定です。

A5・古くなったパネルをリユースおよび九五%以上リサイクルできる工場が、各地で稼働をはじめています。

A6・電気料金のお知らせには、再エネ賦課金だけが特出して書いてあって、原子力関連の膨大な国民負担や送電線使用料が書いてありません。なぜでしょう。

さて、ソーラーシェアリングの導入のために様々な申請書類の準備が必要です。これは経験のない農家にはなかなか越えられない高い壁です。さいわい非営利でその手続きの一切を応援してくださる「市民エネルギーやまぐち株式会社」<https://www.yace.co.jp/>の支援を受けることができました。

実際に導入してみると、不安定な農作物の収穫以外に年間を通じた収入が生まれることで、将来の計画へ向けた大きな安心感が生まれました。

資源や食べ物を確保しようと派兵したりミサイル基地を作ったり、テロにおびえたりするのはなく、地域で食べ物とエネルギーを生み出してその恵みをわかちあっている。原油やウランの輸入のために流出していくお金が地域でまわるようにする。その仕組みづくりこそ、足もとから平和を生きる道につながるものだと感じています。

(つづく)

✉ y@ankei.jp

📄 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

3

安溪貴子・安溪遊地

沈黙の春

つばめ農園で稲作を始めた二〇一二年には、たくさんのヤゴが田んぼに育ちました。初夏には赤いウスバキトンボ、七月末にはギンヤンマやアオイトトンボ、キイトトンボ、夏の終りには赤トンボのいろいろな仲間が水田の上を群れています。ツバメが子育てに取ってきたトンボが大きすぎて雛の口に入らず巣の下におちていたこともあります。

ところが、二〇一九年には、ヤゴの数が少なく、夏も秋も、トンボの数が極端に少なかったのです。九月にはいつて田の上に目をこらして、ウスバキトンボが二〇匹くらい群れているのを見てややほっとしたのですが、毎年東南アジアから渡ってきて九州で繁殖するトンボが、こんなにも少ないとは……。

二〇一六年八月下旬、家の上の棚田に蕎麦を播きました。一カ月もすると白い花が咲き、モンシロチョウ、ツマグロヒヨウモン、キアゲハ……、たくさんのチョウがやってきました。スズメバチもアシナガバチもセイヨウミツバチもハナムグリの仲間もやってきて虫たちの饗宴の場になりました。二年後、こんどは、家の前の

苗代のあとを蕎麦畑にしました。種まきが少し上手になり、一面に花が咲きました。けれど少数のマルハナバチが花をめぐっただけで、他の虫たちはほとんど現われませんでした。

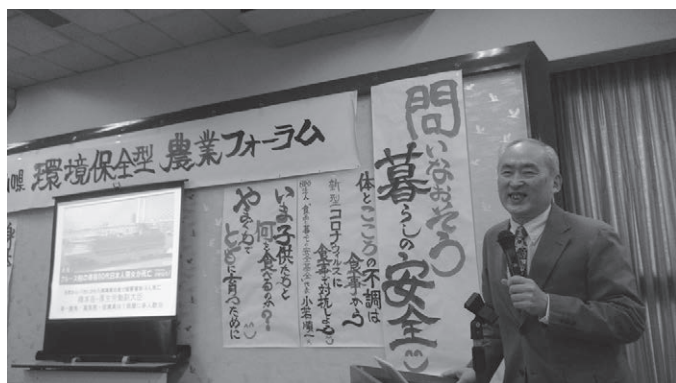
「夜になれば、家の灯りを求めて蛾なんか集まってきて窓に重なり合うように貼り付いとったが、今では蚊帳も網戸もいらんくらい。以前は二〇群も飼っていたニホンミツバチがいまでは「ゼロ」。ご近所の農家の言葉です。

これらの変化は、水田の苗箱に振りかけて穂が出たあとまで効力を保ち、秋のカメムシ防除にも広く使われる、新しい農薬の登場がきっかけのようです。今ではEUで禁止となったフィプロニルやネオニコチノイド系の農薬、発がん性を隠していたとして、アメリカ合衆国で四万件もの訴訟が起きている除草剤グリホサート（ラウンドアップ）。日本の農水省も、農薬取締法を改正して、今年の四月からは、従来下流の川の生き物への影響しか見ていなかった環境影響を、動植物全体に拡げて毎年評価しなすことになりました。間に合えばいいのですが。

ポストハーベスト農薬汚染

話は飛びますが、つばめ農園から一〇キロし

小若順一さんの講演タイトルは、「新型コロナウイルスに食事で対抗しよう」というタイムリーなものでした。



か離れていない、津和野の旧藩主別邸が、亀井温故館として公開されています。そこに、孫文が筆をふるった「知難行易」という額がかかっています。「知るは難く行うは易し」。逆説のようですが、気付くことが行動への近道、頭の中が変われば体はついてくるという意味でしょうか。

日本の輸入農産物がどんなに念入りに収穫後の農薬処理をされているかを、私たちが「知

る」機会がありました。一九九〇年に、大学の授業で見せようかと『ポストハーベスト農薬汚染』（学陽書房）というビデオを購入したのがきっかけです。合州、国を中心に三年間の取材を経て、二〇分にまとめたビデオですが、日本に輸入される農産物が収穫のあとどのようになんげんな農薬まみれにされているかを見つ類・小麦・トウモロコシ・大豆などの現場をまわって取材したものでした。それを見たショックは大変なものでした。貴子は、いつも安い物をするスーパーに行って、オレンジやレモンの売り場からこわくて二メートル以上も離れて歩きながら、結局何も買えないで、途方に暮れて戻ってきました。

大学の近くに借りていた一軒家の目の前の使われていない小さな田んぼを借りることができたのは幸いでした。ほんの三〇坪ほどの土地をくわで耕すところから近所の方が教えてくださいました。安心安全な食べ物に格別の注意を払っているグリーンコープ生協に入ることできました。

このようにして始まったわが家の「着土」への動きは（祖田修『着土の世界』家の光協会）、一九九三年の鳥取県東伯町（現琴浦町）で初の稲作体験をへて、山口市仁保で自給的

な稲作を二〇年続け、二〇一二年の「阿東つばめ農園」の開園につながり、現在の一ヘクタールの家族農業にいたったわけです。その間、農薬も除草剤も化学肥料も使わない農業の取り組みの力強い仲間になってくださったのが、山口県環境保全型農業推進研究会（愛称・山口かんぼ研）でした。山口かんぼ研は、発足当初は合鴨水稲同時作が柱でしたが、どのような農法でも排除しあわないという原則によってゆるやかなつながりを保つ会として現在も続いています。

二〇二〇年三月一日には、わが家の暮らしを根本から変えた、あの『ポストハーベスト農薬汚染』のビデオを作った、食品と暮らしの安全基金代表・国際チェルノブイリ福島連盟副会長の小若順一さんを山口市に迎えて、第二九回環境保全型農業フォーラムを実施しました（写真）。山口かんぼ研の多彩な取り組みについては、またお話しする機会があると思います。

（つづく）

（あんけいたかこ、山口かんぼ研副会長

・あんけいゆうじ、同理事）

✉ y@ankei.jp

📖 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

4

安溪貴子・安溪遊地

いま種子が危ない

新型コロナウイルスが思いがけぬ展開をしています。大都会の方々は家にこもらざるを得なくさぞかし大変なことと思います。ニュースを聞きながら、花冷えの寒さの中、春の農作業がたいへん忙しいつばめ農園ですが、こぶしの花や山桜の花、つばめの到来に心を動かされている今日がたいへんありがたいことだと感じています。

「食の主権 (Food sovereignty)」という言葉をご存じでしょうか。グローバル企業によって支配される農業ではなく、政府主導の食糧安全保障ともちがって、何を育て、何を食べるかを決めるのはそれを育てる農民自身だという考え方がです。そのために決定的に大切なのは、種子(たね)を守ることです。

種子は、生命の根源そのものであり、栽培植物の品種は、生物と文化の多様性の精華といふべき大切なものです。私たちの食の基本である米・麦・大豆のすぐれた品種を安定して供給するために、優良な種子の生産・普及を都道府県が責任をもっておこなうことを支えてきた法律である種子法(主要農産物種子法)が十分な審

議や農業関係者への説明もなく、二〇一八年三月に廃止になりました。前年八月には、早手回しに「農業競争力強化支援法」が施行されていて、その第八条には、民間業者による種子の生産への参入が進むまでの間は、公的機関は、原種等を維持して、そのデータをそっくり民間業者に提供する役割を担うことが明記されています。

日本の野菜の種子は種子法で守られていなかったのですが、どうなったでしょう。近くのホームセンターでご覧になれば、日本で作られている種子が現在ほとんどないことに驚かれるでしょう。そして、野菜の七倍の規模の日本の稲や麦や大豆が、グローバル企業の新たな金儲けの目当てとなったのです。野菜で起きたのと同じように多様な固定品種が失われ、その種子の価格もはねあがり、しかも毎年買わなければならないという事態が近づいています。

民間企業が開発した稲である日本モンサントのとねのめぐみ、三井化学のみつひかり等を栽培している農家に聞くと、これらの稲を作る時は、使う肥料や農薬もすべて指定されており、収穫した全量を企業に渡す義務がある契約を結ぶのです。それは、食の主権を放棄して企業の奴隷になることと同じです。

さらに、二〇二〇年には「種苗法」を改悪して、

唐箕（とうみ）でのイセヒカリの種もみの風選
古い農具ですが、阿東つばめ農園では現役で働いています。2020年4月5日撮影



奇跡のお米・イセヒカリ

日本の種子を守り、食の主権を大切に
実践のひとつとして、阿東つばめ農園で育て

登録品種における農家の自家増殖を、一律禁
止することを閣議決定し、四月以降に審議入
りする予定です。このことは「日本の種子を
守る会」の活動の紹介とあわせ、今後の連載
で随時とりあげたいと思います。

ているお米の品種があります。それはイセヒ
カリというお米です。

伊勢神宮の神田で栽培されていたコシヒカ
リが二度の台風で全滅した一九八九年、二株
だけ倒れなかった奇跡の稲がありました。そ
の種子を収穫し、品種として安定するまで民
間育種したのが今も神前に供えられるイセヒ
カリです。現在その種子を保存し、種もみの
もととなる原種とその親である原々種を育て
ておられるのが、阿東での私たちの化学物質
を使わない稲作の師匠である吉松敬祐（けい
すけ）さんです。

去年は原種を分けていただいて、田の隅に
一本ずつ苗を手植えました。ていねいに手
取り除草して、手刈り、ハゼ掛け乾燥、脱穀
して、自家用の種もみづくりに挑戦しました。
種もみの芒を取り、唐箕で選別し（写真）、塩
水選で重い籾を選び、温湯殺菌して、芽だしし、
ポットに撒いて苗代に降ろします。

つばめ農園では、除草剤や農薬、化学肥料
を一切使わないので、いかにして草を抑える
かが農法のポイントになります。乳熟期の稲
をカメムシが吸うと黒い斑点のある米粒が混
じって見た目が悪くなり、等級検査でも低く
なるのが悩みでした。ここ数年は、ご近所の

色彩選粒機を使わせていただけようになっ
て、斑点米や未熟米などをコンピュータが一
粒ずつ判断して飛ばしてくれるので、毎年き
れいに粒の揃った一等米が出荷できるよう
になりました。

阿東つばめ農園のイセヒカリは、農園主の
安溪大慧（だいえ）が、昨年、国のエコファ
ーマーの認定を取得した「特別栽培農産物」
として全国にお届けしています（文末のアド
レスで「イセヒカリ」を検索）。

肝心のお味は、かみしめると甘みがあつて
たいへんおいしいお米で、玄米も人気です。
お寿司にも向き、酒米でもあります。リピー
トして下さる方々が「冷めてもおいしい」「お
じやにも最高」とおっしゃいます。炊き方の
コツは、前の晩に研いで翌朝炊くこと。いき
なり炊くときは、いつもより一五%ほど水を
多めにするとうまく炊けます。

家にこもらなければなくなった都会の
人たちには、カップラーメンやレトルト食品
の備蓄よりは、安心できるお米の年間契約を
お勧めします。

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）
（つづく）

 <http://ankei.jp>
 y@ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

5

安溪貴子・安溪遊地

空き家を「おひさま交流館」に

眠っていた木々の芽ばえ、そして若葉から青葉へ。この季節の山々は赤や黄色そして緑と、華やかに衣替えをします。四月一日に溜池からの給水が始まると盆地の高台にある我が家からは、眼下の平原に、次々と水が溜められ、水の国が誕生するのが見えます。連休は町から戻って田植えを手助けする人々が見られますが、今年はどうなるでしょうか。うちのツバメは雛が孵りそうです。でも、村に何軒かある空き家にはツバメはけっして巣をかけません。

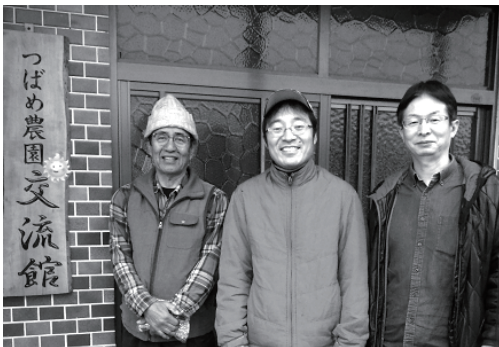
村の中に空き家ができると、そのまわりの草を刈る人がいなくなり、景色からいとおしさが消え始めます。藪が広がるとイノシシが安心して田畑を荒らすようにもなります。空き家率が山口市では一七％に達していて、放置して廃屋になると崩れる危険もあって手が付けられなくなります。

そんな空き家のひとつを、地域が元気になるような多世代交流の場にできないか、と考えて、つばめ農園では、昨年九月から、近くの空き家を改修して、交流拠点にすることに力を注いできました。山口市定住促進課が進める「空き家

×交流」というプロジェクトに応募して、選定されたのです。

公開プレゼンによる審査には「電気も自給できる阿東つばめ農園・おひさま交流館」というタイトルで臨みました。災害などがあってもライフラインが途切れない、持続可能な暮らしのたしかさを実感できる交流拠点として空き家を改装する計画は、幸い審査員のみなさんに合格点をつけていただきました。

廃屋になっていた部分の取り壊しと、大学生に不評のくみ取り便所の改修、バッテリーを備えた自立電源の設置などが主な取り組みです。太陽熱温水器・薪風呂・薪ストーブなども欠か



空き屋を改装したおひさま交流館
(オーナーの安溪大慧＝中央＝と
応援団のみなさん)

せないものです。山口県立大学大学院の安溪ゼミで学ばれた社会人の中で、もと土建屋さんでりんご園の農家民宿とイタリアレストランのオーナーだった下瀬さんと、「村のトイレ」で原発いらない活動に忙しい安藤さんに声を掛けました。車椅子の林業家兼大工で陸上イージス・ミサイル基地建設に反対の白松さん、広島県府中市で自然エネルギー導入のノウハウを持つ石岡さんの協力もいたっていて、この三月で一応事業は完了しました。



薪ストーブのまわりでの未来会議やまぐち



廃屋部分を取りこわしたあとの交流スペースで薪焼きピザのパーティ
(山口県立大学卒業生の伊藤光平さん撮影)

「適密適疎の未来」への道のり

地球規模でのウィルスの拡散の速度を遅くするために、密閉・密集・密接の三つの「密」を避けようと政府が呼びかけています。これは、通勤ひとつとってみても過密都市では大変に実現が難しい目標です。自然環境に与える負荷が大きすぎる大都市の多くが、大きさだけでなく密度の面でも「限界都市」となっていることに改めて気付かされます。それに引き替え、これまで過疎による

「限界集落」などと呼ばれてきた日本の田舎こそが、実は「適疎」でありえます。

二〇二〇年一月二日、鳥根県の邑南町で「中国山地未来会議」が開かれ、「過疎は終わった！」を旗印に、百人

もの人が集まって、新しい時代のための狼煙（のろし）をあげました。ここに家族三人で参加したつばめ農園では、若者と地元の人たちが、自由にかつ具体的に意見交換できる場として「未来会議やまぐち」をスタートさせました。毎月の交流会では、山口県立大学の学生たちが、積極的に参加してくれています（現在は月例会を休止中）。

都市での生活を体験したうえで、若者が田舎での暮らしの実際を味わい、やがては定住も考える。そうした可能性を胸に、エネルギーまで自給できる「なつかしい未来」の田舎暮らしを实地に体験できる場のひとつが、「阿東つばめ農園おひさま交流館」です。都会で転んで一人では起き上がれなくなった時、雇われていることに息が詰まった時に、ふと思いついて下さい。田の草を取ったり、薪割りをしたりして、いのちの洗濯ができる場所、そして、使うお金は少なくとも、自然の循環にそった暮らしのゆたかさを実感できる、ライフスタイルの乗り換え駅のひとつがここに

あることを。
(つづく)

(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

✉ y@ankei.jp

 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

6

安溪貴子・安溪遊地

甘みのある白大豆・タマホマレ

六月に入り、つばめ農園の眼下は、稲が植えられた田んぼの緑の中に、収穫期を迎えた金色の小麦畑が点在しています。うちもポット田植え機でのイセヒカリの田植えを終えて補植と除草が始まります。畑ではタマネギ、ニンニクの収穫が近づいています。トマトやキュウリもポットに種をまいて育てて、畑に移しました。津和野の自然農法の方からいただいたライ麦が2年目の花を咲かせ、草丈が2mにもなっています。畑や道端の雑草が、コハコベやオイヌノフグリなど地中海原産の草から、ハルジオン・ヒメジョオンやアメリカフウロなど北アメリカからやってきた草にバトンタッチしています。これからは、早朝と夕方が農作業に向けた時間になります。

阿東つばめ農園では、全部で六枚ある田んぼのうち一枚を順番に休ませて、そこに大豆を育てています。これには、除草剤を使わない農法で増えやすい水田雑草を減らすという効果もあります。品種はタマホマレという白大豆です。ほんのりと甘みがあるって、豆乳や味噌や煮豆に向いています。



大豆の種まき

収穫後一年たっても味が落ちないどころかますます良くなるという性質があるそうです。土が乾いていないと種まきの機械がうまく働かせません。まいたあとは、お湿りが欲しいのですが、大雨が降って水に浸かるようだと豆が発芽できません。今年は、田植えと重なって忙しいのですが、晩には雨が降るといいうぎりぎりのタイミングで五月三〇日に種子を播くことができました。

数日で緑の双葉が出てくるはずですが、初めての年は三分の一ほどが途中でなくなりました。

ちようどキジバトが子育てをする時季に重なって、食べられてしまったのです。ご近所の大豆農家は、忌避剤であり防かび剤でもあるチウラム等をまぶした種子を播いているようですが、一切の人工化学物質を使わないつばめ農園では、畑全体を鳥除け網で覆います。一枚二〇〇坪ある網をひろげて二枚かけます。

遺伝子組換え大豆とグリホサート系除草剤

さて、日本国内で生産されている大豆は、毎年輸入される大豆約三〇〇万トンの一〇分の一に満たないものです。輸入量の約七割を占めるアメリカ産の大豆は、その九割までが遺伝子組換え作物なのです。遺伝子操作する目的は、大豆畑にすべての植物を枯らすグリホサート系（商品名ラウンドアップ等）の除草剤を撒いて、大豆にそれでも枯れない耐性を持たせることです。遺伝子操作食品そのものの安全性は、ただいま大規模人体実験中という段階だと思いますが、問題は、輸入食品が一定量のグリホサートを含むことです。二〇一七年一二月を期して、禁止に動く世界の潮流に反して日本政府は輸入食品に対する

基準を大幅に緩和しました。小麦で六倍、ソバとライ麦では一五〇倍の三〇PPMになりました。ゴマではなんと二〇〇倍の四〇PPMです。もともと二〇PPMまで許容と高かった大豆は据え置きでしたが、日本人が日常的に食べる食材がたくさんグリホサートを含んでもよいことになったのです。

グリホサート系の除草剤は二〇〇二年にモンサント社の特許が切れて、今では量販店や百円ショップなどで安く売られるようになっています。その宣伝によると、毒物でも劇物でもなく、安全な「普通物」に該当し、しかも土壌中では速やかにアミノ酸等に分解して残らないと謳われています。

ところが近年、グリホサートによって健康障害が起こるといふ多数の論文が発表されています。それを踏まえてわかりやすくまとめた木村―黒田純子さんの報告は企業の宣伝とはまったく異なるものです（岩波の『科学』二〇一九年一〇月号と一一月号、環境脳神経情報センターのサイトで読めます）。それによるとヒトの健康障害としては、発がん性、自己閉症など発達障害、生殖系への影響、パーキンソン病、急性毒性としては皮膚炎、肺炎、血管炎などが挙げられています。また動物実

験では、発がん性、DNAの損傷、腸内細菌層の異常、脳で重要なグルタミン酸受容体への影響、発達神経毒性、暴露した個体に影響がなくても二代目三代目に障害を起こすエピジェネティックな変異、などが報告されています。IARC（国際がん研究機関）は、二〇一五年三月、除草剤のグリホサートとその製剤について、ヒトに対して「おそらく発がん性がある」とするランク付けを発表しました。この後、日本政府を含めてこの見解を否定する意見がたくさん提出されました。しかし、農薬の安全審査はその原体（この場合はグリホサート）だけの影響を検討するので、前記の報告では様々な添加物を含む製剤として市販されているものを調べたところ、なんと、原体の一〇〇倍もの毒性があることがわかったのです。原体を使った動物実験で毒性が出ないぎりぎりの値の一〇〇分の一をヒトへの安全基準値としている現在のやり方そのものが崩壊するデータです。

（つづく）
（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

✉ y@ankei.jp

📖 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

7

安溪貴子・安溪遊地

種子をとる

山も田畑も緑に染まる七月を迎えました。ツバメの子供が巣から出てひとり立ちする季節です。大豆は無事に芽を出して、除草を兼ねた「土寄せ」が待っています。大豆やイネの種はもちろんです。野菜も、数年前から「自家採種」を少しずつ増やしてきました。こぼれ種が芽生えて毎年いただけるシソやエゴマ。「作らないか」と種をいただいで播いたトウモロコシや落花生を手始めに、おいしかったのでカボチャ、マクワウリ、ソウメンウリなどの種を取って播いてみるとたしかに芽が出ます。トマトやキュウリは種の取り方も教わりました。最近種の交換会でトマト、ナス、ライ麦、オクラ、大根などをいただいで育てています。そうそう、二〇一八年の環境保全型農業フォーラムでは、広島県農業ゾーンバンクを創立以来運営してこられた船越建明さんにお話をさせていただきました。

おいしいから来年も食べたいなと思うトマトやカボチャは、食べるときに捨てる種を洗って取っておけばいいのですから、簡単そうです。でもやってみると……、以下はやるなかで学んでことです。

トマトやキュウリはヌルヌルした皮を被って

います。これは取り除いたほうがいいし、水で洗うときに浮く種はいいのことが多いので、取り除きます。冬保存するときに冷蔵庫に入れたほうが無難なのは、暖房した家の中では種が越冬したことにならず、芽が出ないことがあります。保存中にカビることもあり、春に播いて芽が出るまでドキドキです。なかにはF1といって異なる品種を掛け合わせてきた種で、芽が出なかったり変なものが芽生えたりします。でも多少の変化は「おもしろい」ということにしています。

種・農・人をつなげる

さて、国会では種苗法を変える法案が強行採決されるかと心配しておりましたが継続審議となりました。法案提出の理由としては「植物の新品種の育成者権の適切な保護及び活用を図るため」とあります。日本の育種農家が苦勞して作った優良品種が海外流出しないようにする法律改正だと聞いて、「それなら賛成」と思った人も多いようです。多湿な日本でもヨーロッパ産なみの味と見かけのブドウをと開発されたシヤインマスカットなどの品種が外国で栽培されて、日本の利益を損ねたというような説明を農水省はしています。けれども、実際には国立の



つばめ農園おひさま便り

8

安溪貴子・安溪遊地

大豆畑の除草

八月、梅雨がやっと明け、新型コロナのため休んでいた山口線のS1の運転が再開しました。カメラをもって沿線に詰めかけた方々を尻目に、集落では早朝から総出の水路や道路沿いの草刈りが年中行事です。九時を過ぎれば暑く一〇時には作業を終えます。

このたびの豪雨被害にあわれた方々にお見舞いを申し上げます。阿東つばめ農園でも二〇一三年七月二八日の三二四ミリの雨で裏山からの土石流が発生し、山の土砂に一〇センチほど覆われた被害田の地力はまだ回復できていません。さらに、稲の下面にひろがって養分をうばう、コナギなどの水田雑草を少しでもおさえるために、奮闘しなければなりません。

長かった梅雨の間、大豆畑はぬかるんで草刈りをするのができず、草も大きく伸びて、大豆が草のなかで花をつけ始めました。農作業を手伝いたいと来てくださった方と早朝から草刈りをしました。土が少しは乾いたので除草機も入ることができて除草機が走れないところは手刈りです。四時間弱の作業で、大豆に風が通り涼しげに見えます。これで遅れていた「土寄せ」ができます。

作業を終えて畔にすわり、冷たくした紫蘇ジュースの香りに夏がやってきた実感が湧いてきます。ムクゲの花が咲いています。ナツズイセンも咲き始めました。棚田の土手にはカワラナデシコやツリガネニンジン、アキノタムラソウが咲き、マルハナバチの羽音が聞こえてきます。早生のコシヒカリにも花が咲き始めました。コサギやアオサギ、最近はずうサギがいて、あぜ道を歩いていると飛び立ちます。

お金に頼らない仕組みづくりへ

SNSの友人の発信でつばめ農園での草取りが追いついていないことを知った、乗馬が長年の趣味のパワフルな方が手伝いに駆けつけてくださいました。それはたいへんに有り難かったです。希望されるアルバイト代をお支払いすることができません。家族農業のつばめ農園では、学生などの実習を受け入れることはあっても、実はまだお金を払ってアルバイトをお願いしたことが一度もなかったのです。助っ人の女性は、町のマンションに暮らしておられるということですので、いま食べきれないほど穫れるキュウリ、トマト、シソの葉などをとりあえずお土産にさしあげて、自動車での往復の燃料費程度だけをお支払いすることにしました。そ



れだけではあんまりなので、燃料費の領収書に「大豆四時間」とメモして、その控えをお渡ししました。「これはクーポン券です。順調に穫れるか穫れないかはまだ判らないのですけれど、働いていただいた時間に合わせて、穫れた大豆をお渡しするというお約束の印です」と申し上げました。

これは、なるべくお金に頼らないで暮らしを回すという、祝島の人たちに習った知恵を実践できないか、というアイデアなんです。

祝島は、中国電力が計画する上関原子力発電所の計画を三〇年以上にわたって阻止し続け、一〇億円以上の漁業補償金を受け取らないという島ですが、そこで二〇一一年五月にうかがったお話を抜粋しておきましょう。

よそから入ってくる人に助言しているんですが、都会の人が「どうやって金を稼ごうか」という発想で来られると、祝島では壁にぶちあたってしまう。祝島のよさって、できるだけお金を動かさないしくみで暮らしてきたところなんですよ。だから、なんでもお金に換算して考える人と対面しちゃうと、祝島の人たちはうまくつきあえなくなっちゃうんです。で、僕が今回定住したいという家族ともお話するんですけど、無理して金に置き換えようとするな、と。例えば、ビワの収穫を手伝うとか、ヒジキを採るのを手伝ったとしたら、一日働いたから日当何千円というように金に置き換えないで、働いた分を、ヒジキ何キロとか、ビワ何パックとかいうように現物でもらうようにしなさいよ。シーズンを通して手伝ったら、例えばビワの木を五〇本世話するのを手伝ったら、そのうちの三本か四本分の木は「おまえ収穫していいぞ」というような形でもらいなさい。そうし

て金にしたいんだったら、もらった現物を自分なりのネットワークを生かしたマーケットで売る努力をして、そこで自分で金にしるというんです……。

このたびつばめ農園で「大豆四時間」というクーポンを出したのは、このような祝島の知恵と、日本でも一時流行った地域通貨を組み合わせたようなアイデアをなんとか形にできないか、という考えもあったのです。子どもが発行する「肩たたき券」のようでもありますが、お金のやりとりでは生まれません人間関係を大切にする、というコンゴ民主共和国での物々交換の市場との出会いの中で、私たちが学んだ知恵の実践にもつなげたいと願っています。

（つづく）

参考文献

安溪遊地、一九八四『原始貨幣』としての魚——中部アフリカソンゴラ族の物々交換市『アフリカ文化の研究』アカデミア出版会（京都大学に提出した博士論文の日本語訳です）

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）



つばめ農園おひさま便り

9

安溪貴子・安溪遊地

動物たちのおつきあい

阿東高原では、コシヒカリの収穫がたけなわですが、つばめ農園のイセヒカリの稲刈りは一〇月の予定です。畑ではキュウリ、トマト、ナス、ピーマンに続いて、カボチャやミョウガがとれてきました。まもなく大豆を枝豆で食べられるのではと楽しみです。干しておいたライ麦の来年度の種取りもしました。

今回は田畑に出没するけものたちのおつきあいの話です。

モグラは、なぜかトマトの畝に穴を明けるのが大好きで、今年はトマトの半分以上が青い実をつけたまま次々に枯れました。いろいろな品種の種を蒔いて四つの畑に苗を分散して育てているので、食べるには困りませんが。春先にはエンドウをやられました。モグラはミミズを食べようと穴をあけるのですが、その通路を通ってネズミもやってきて、サツマイモが毎年かじられます。今年の春はジャガイモ、そして玉ねぎも食べられていました。

モグラは振動が嫌いというので、カラカラという音が出る風車をあちこちに立ててあります。ペットボトルでカラフルな風車を作るのが農園主の安溪大慧（だいえ）の趣味で、畑に並んだ風車が回るのはかわいらしい光景ですが、馴れてしまつてあまり効き目はないようです。また、



脱穀機でライ麦の粒をはずして、来年の種子をとる

雑誌で読んだ「正露丸」をモグラの穴に入れることを試みていますが、なかなか被害は減りません。

やわらかな大豆の苗がおいしそうに生えそろったころ、畑の山に近いところの大豆の葉や茎が食べられているのに気づきました。ノウサギです。畑の山側にネットの垣をまわしました。跳びこえる力はあるけれどもこれで防げたようです。以前、冬に雪が積もったあと畑に行ってみると、大根の地上部分だけすっきり食べられていました。ネズミや虫たちと違う無駄のないノウサギの食べ方なら、なんだか許せる気持ちになります。

イノシシには、サツマイモの芋が大きくなり始めた頃株ごとひっくり返されたりします。田



枯れ草と発酵した馬糞をまぜて、畑用の堆肥をつくる準備

んぼのお師匠さんのところでは里芋も毎年何
度もやられて気持ちがいっているとおっしゃいま
す。また稲が実る田んぼを走り回られた時は、
稲が泥だらけになって泣きました。イノシシ
は、集落全体の山際に垣をつけたり、夜中も
点滅する光を置いたりして防ぎます。獺をす
る人に誘われ、大慧が解体を手伝ってお裾分
けをいただいたりもします。耕作放棄地がふ
え、ことに山裾が耕地ギリギリまで森になっ
ていて、イノシシもノウサギもキツネもタヌ
キも、そして所によってはシカやニホンザル
も、森が「住み処」ですから、垣こそあれ美
しいものが目の前にあれば、食べたいだろ
うなと思います。「昔はイノシシ垣の向こうの

スギやヒノキの人工林のところは草原だった
んだ。木を植えてしまつて、動物は出てくるし、
田畑は日陰になつてしまつていいことはない」
とお師匠さん。こういった人工林の持ち主は、
今では街にお住まいで、田舎で暮らす人の困
りごととは届いていないのでしょう。

ここは、中国山地の西の端にあたり、ツキ
ノワグマもやつてきます。お師匠さんはニホ
ンミツバチの巣箱を置いています。ネオニコ
チノイド農薬が撒かれるようになって、ミツ
バチの群れがほとんど居なくなるまでは、ク
マが蜜を食べに時々やつてきたそうです。山
裾の農舎ではいつもラジオをつけっぱなしに
しています。たがいに不意打ちで出会うと事
故になるので、いきなり驚かさなことが大
切といひます。師匠は家の入り口の角でばつ
たり出会ったことがあるけど、腹に力を入れ
て威嚇を持って、コラアッ!! と大声で言っ
たら引き返していったそうです。それをやた
らに怖がつて、行政はクマが出たら必ず殺し
てしまうから、クマとは静かにつきあうよう
にしているんだとのこと。

物々交換から地域資源の循環へ

前号に書いた、草集めの上手な〆さんに、
その時々農産物をさし上げながら、堆肥を
つくつて土石流の入つた田んぼの地力造りを

しなければ、という話をしていたところ、耳
寄りな情報を下さいました。ご自分の愛馬が
預けてある乗馬クラブの馬糞堆肥を使つてみ
ませんかとのこと。さっそく軽トラックでい
ただきに行つてみたところ、この道五〇年と
いうご夫婦によつて二〇頭の馬たちが大切に
世話されていました。そこでは、おがくずと
混ぜた馬糞を背丈よりも高く積み上げて発酵
中です。積んで四か月ほどたつたものは、直
接畑に入れても害のない熟した堆肥になるの
で、秋野菜の準備をする近くの方が次々にも
らいに来ておられました。舎飼の牛や鶏と違
つて、馬は草が主食で、反芻しないため馬糞
の含む繊維質は多く、その堆肥は炭素とチッ
素の比率（C/N比）が土作りに適度なもの
となつています。そんな宝の山が、取りに来
れるならすべて無料とおっしゃるのです。こ
んど畑にまいた馬糞堆肥の効果を踏まえて、
調子がいいようなら、つばめ農園の稲の収穫
が終わつたら、ダンプカーを借りて田んぼの
土づくりに役立つ馬糞堆肥をいただきにい
こうと思つています。

(つづく)

(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)



y@ankei.jp
<http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

10

安溪貴子・安溪遊地

ウンカの被害が出ました

阿東高原は、気温が二〇℃を切りストーブが欲しい季節です。

ここは、コシヒカリを植えた田んぼが多く、今年は、トビイロウンカに襲われてほとんど田が実りませんでした。田んぼの黄色い稲穂のなかに丸く坪状に枯れた「坪枯れ」を見ることは、車を走らせていると時々見る場面でした。しかし今年も田んぼが丸ごと枯れた場所が随所に見られ、有線放送でも農協からのお知らせで、ウンカが発生しているから農薬を撒くように、効かなくなっている農薬があるので相談してほしいと毎晩放送していました。我が家の品種イセヒカリは、茎が太くしっかりしているのです、これまでウンカにやられたことはない、とお師匠さんに言われていたのですが、わが家でも坪枯れが始まった田では、たちまちそれがひろがって、数日でみるみる枯れていきました。お師匠さんの田んぼも、ほとんど全滅に近い被害を受けています。山口県内の有機農業仲間の田んぼも多く被害をうけ、農薬を撒いた田んぼも、農薬を使わない田んぼも「今年のウンカは農法を

選ばずやってきた」という声も聞きました。

秋ウンカとも呼ばれるトビイロウンカは、ベトナム北部で越冬し春になると中国南部に移動して増え、梅雨時期にジェット気流に乗って一日半くらいかけて九州に到着、さらに増えてそれが西日本に、そして東日本へも風に乗って移動します。日本では越冬できないので毎年この生活の繰り返しなのだそうです。ベトナムや中国でも今日では殺虫剤を使うのでしよう。そして九州でも、「これまでの農薬が効かない」農薬耐性をもつウンカが選抜されてしまい、それがやってきたというわけです。殺虫剤を撒いてウンカを殺しても卵は死なないので、卵からかえった次の世代は農薬によって天敵のクモやトンボ、カエルがいなくなかで、爆発的に増えます。幼虫は稲の汁を吸って枯らしてしまいます。また、ウンカとともに飛来するカメムシの一種カタグロミドリカスミカメがウンカをおさえる抜群の天敵だ（農研機構のサイトで「ウンカ」を検索）という報告があります。

八月半ば、稲が実り始めると未熟な稲穂を吸汁して斑点米のもとになるカメムシを排除するために晴れた日の午後、殺虫剤が散布されます。長いプラスチックの管を田んぼに差



ソーラーシェアリングの田での稲刈り。少しの刈り残しももったいないので、大切にコンバインに運びます。

し渡して両側を人が持ち、歩きながら真っ白い農薬をナイヤガラのようなように散布する方法です。撒いている当人にも農薬がかかる辛い防除なのでヘリコプターで撒く方法もありましたが、去年頃からドローンが活躍し始めました。積める量が限られるので、従来より高濃度の農薬を撒くこととなります。農薬を使わないうちの田んぼでも、原因ははっきりしません、クモが激減しています。

ここで暮らし始めた二〇一二年頃は、朝早く田んぼに行くと、クモの巣に朝露がかかって一面に薄い白布のようにつらなり、お日さまの光でキラキラと光るのが見えました。気がつくとも今年などはクモの巣がほとんど見当たりません。田んぼに入るとクモはいるのですが以前のように多くはないのです。そういうえば、家の軒下にはコガネグモやジョロウグモが大きな巣を作り、セミやチョウチョまでかかるのを見ますが、その数も半分以下に減ってきたようです。ミツバチだけでなく、アシナガバチやスズメバチもほとんど見かけなくなっています。

毎々が一年生

ウンカの被害を減らすために現在とられている方法は、長く残留する農薬を箱苗の段階で播いておくこと、いよいよ飛来して増え始めたら、稲の根本にまでかかるように、よく効く新型農薬をしっかりと播くことです。グローバル企業と農協などが協力し、研究者が実験を繰り返して、新しい農薬を開発したというニュースが「朗報」のように伝えられます。ただし、幼虫には効いても、成虫にはあ

まり効果がなく、卵には効きません。植物自体に染み込んで長く虫を殺し続ける、残留性の強い農薬が求められるようになってきているわけです。

一方で、農薬を使わない農法の研究には、大きな予算がつきにくいという現実があります。お金と政治権力による学問の支配という、いま熱い話題については、回を改めたいと思います。ですが、そもそも、農薬のような化学物質で昆虫に打ち勝とうという試みに、明るい未来があるとはどうも考えられません。昆虫は、四億年以上も昔に地上に現れた生物界の大先輩なのです。さまざまな危機にも人間よりはるかに広い適応性をもっているものもいるにちがいません。わたしたちはいったいどこへむかっているのだろう、と思います。

つばめ農園では、幸いウンカの被害を免れた田もありましたが、全体としてのお米の収量は昨年の半分以下となりました。今年の事態を踏まえて、来年はどうすればいいのか？ 今年の惨状をよい学びのチャンスに変えていきたい。「今日から来年を考えるしかないよね。農家は毎々が一年生」と言い合っています。(つづく) (あんけいたかこ、あんけいゆうじ)



つばめ農園おひさま便り

11

安溪貴子・安溪遊地

地域が学校

ストーブが夜には欠かせなくなった山口市北部の阿東徳佐高原から。山裾を歩いて今日はリンドウの花がたくさん咲いているのを見つめました。キク科のサワヒヨドリも一緒に咲いていました。

さて、お米の収穫を終えて色彩選別機にかけた結果、今年の販売できるお米は例年の半分以下となりました。ウンカの被害が大きい田んぼの中を刈り取りの前日に歩くと、稲の株元が枯れて、ベタバタして歩きにくい印象でした。それでも五枚の田んぼのうち一枚だけは無事実りをいただけて、見渡しても、稲穂を見ても美しく、田んぼの中は株元が乾いていて歩きやすく、さわやかです。並んでいる田んぼでも、なぜこんなに違うのか謎です。

予約して下さっていたお客様の注文を合わせる、すでに不足で、皆さんに事情をお伝えしたところ、少しづつ譲り合ってください、今は一〇月の新米の出荷を終えて、ほっとしています。

一〇月末から一一月にかけて、つばめ農園では山口県立大学の国際文化学部 of 学生の地域実習を四日間受け入れています。大学生が

地域に出て地域で学ぶ「地域が学校・地元が先生」という授業を、私どもは二〇〇五年から担当してきました（安溪遊地・安溪貴子『大学生をムラに呼ぼう——地域づくり実践事例集』二〇〇九年、みずのわ出版）。地域と大学とを結んで、お互いに学び合う試みで、ひとつの授業で多いときは一〇か所もの地域に学生たちともに出かけていたこともあります。定年退職後はおもに地域側での受け入れにまわっています。今回はウィルス感染の危険のある宿泊はやめて車で通ってもらうことにし、若者たちは大学がある宮野駅を午前七時四分発という便で八時には徳佐駅に到着です。朝早いのですが次の便が三時間以上あとでは仕方がありません。

仕事は大豆の収穫と草集めです。体を動かしながら、最近では遠隔授業とアパートでの孤独な食事ばかりで、ほとんど直に対面する機会がない学生たちはマスク越しに話すのも楽しくて仕方がない様



白大豆タマホマレの収穫作業

子です。昼食はつばめ農園の農産物を料理して、草の上での食事をとりました。目の下にソーラーシェアリングが広がり、その向こうにSLが走る中国山地の絶景を前に、なかなか豪華な体験です。

学生の声

二日間の農業体験を終えた学生たちの声を、載せる許可を得て抜粋でお届けします。はじめの一文はみなで考えた授業の意味です。

- ・情報が手軽にどこでも手に入る時代に、地域に出て実習をするということは、自らを身をもって実際に体感することとなり、調べたり、見聞きたりするだけではわからない問題点・現状、その深刻さが発見・把握できることが醍醐味だと思います。次に、そこでの問題を解決するにあたり、現場で



棚田を見下ろす草の上の昼食

自らの頭で考えることで、その場だけでなく、他の問題に対してもアプローチする方法を得ることに実習の意味があると思います。

- ・虫や植物、作物を育てる過程などの新しい情報をインプット……自己のレベルアップに繋げることができました
- ・一言で「大豆を収穫する」といつても昨日今日と二日かけても終わらず、普段お店に並んでいる野菜にかかっている手間の膨大さを学ぶことができました。普段農作物の値段を高いと思っていたが、とても安いものだと感じるようになりました。
- ・自分たちが普段食べているものを作っている大変な農業の現場について体験することで、どんどん便利になっていく世の中でのこういった経験が今後、自分の視野、考え方を広げることにつながると思いました。
- ・一つの野菜を育てるだけでも沢山の手間と労力が必要で、こういった現状は知らないだけで実際にあるんだということを身をもって体験することができました。
- ・今まで、何も考えずに食べてきた大豆やお米、使用してきた電気、見てきた虫や植物についてそれらを見た際、少し立ち止まって考えることができるようになりました。

自分の見ている世界を広げ、豊かにできるのが阿東での農業体験のよさのひとつであると思います。

- ・田舎なので虫はたくさん、力仕事も多いです。そのため自然や、体を動かすことが好きな人はもちろんですが、好奇心旺盛な人にもおすすめでできると思います。農園での作業は単純ですが、普段とは異なる環境の中、何に着目して、何を考えるかに発見があると思います。私は虫が嫌いで、家に出ると追い出すことに必死になってしまいましたが、農園では虫があまりに多く、自分が動くたびに足元で虫たちも移動するのを感じました。するとなんだか、住処を荒らしてごめんね、という気持ちにさえなりました。そこから派生して、人間がどういう影響を環境に与えてきたか、安溪先生とお話をするのも楽しかったです。先生方はその場で疑問に思ったことがあれば何でも丁寧に教えてくださいます。虫や植物など、人間以外の多くの生命と触れ合う環境の中、感じたことについて、生物学、文化人類学を交えながらお話しできる環境は、この阿東つばめ農園の一番の魅力だと私は感じています。

(つづく)

(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

✉ y@ankai.jp

http://ankai.jp



つばめ農園おひさま便り

12

安溪貴子・安溪遊地

生物文化多様性研究所

つばめ農園から見わたせる中国山地。その山頂付近のブナ林が一月に入って一斉に紅葉するのが麦を播く時季の目あてだったそうです。今年は二年かけて増やしたライ麦の種を播きました。稲の収穫を終え、耕耘が済んだ田んぼでは、集落全体と山を距てる垣をくぐって、イノシシがあちこちを気まぐれに掘り返しています。白大豆のタマホマレは、収穫・脱穀を終えて、選別にかかります。田んぼのお師匠さんがつくっている麴と合わせて味噌をつくっていますが、その美味しさはひとりで笑顔がこぼれるほどです。

阿東つばめ農園には、研究と大学等での教育に関わる私たちの拠点として「生物文化多様性研究所」という小さな看板もかかれています。どんな活動をしているか、その一端をご紹介します。

私たちが一九七四年に始めた生物と文化の多様性を勉強するフィールドワークによって得られたデータ。それを論文の形で学界に報告するのが、研究者としての基本です。でも、それだけでは、調査された地域の人たちへのお返しにはなりません。そこで、生物文化に

関する百科事典のような形でまとめて、世界のどこからでも利用できるインターネット上のデータベースはできないだろうか。そんな夢を形にすることが科学研究費補助金のおかげで、できはじめました。コンゴ民主共和国に四〇〇程度あるという民族語のひとつの「ソングーラ語」と、ユネスコが指定する日本の絶滅危惧言語に属する「西表語」の生物名と一〇〇〇か所を越える地名についてインターネット公開中です (<https://airinomote.wixsite.com/mysite>)。今年度は新たに「与那国語」の生物文化データベースに取り組みことになりました。

三五〇〇枚の単語カードを手始めに進めています。これを書いた与那国島の伝承者乙子さんから預かっている絵や文章は、紙の厚さが一五〇センチを越える量です。彼女が小・中学生だった一九六〇年代、沖縄の学校では方言を使うことが禁じられ、使った子どもは「方言札」を首に掛けられました（「文化的ジェノサイド」<http://ankei.jp/yuj/?n=2458>）。また、乙子さんがお年寄りから聞いた与那国島への最初期の移住の伝承の中に、台湾から移り住んだ人びとのものがありますが、島では植民地化の前には台湾との友好的な交流はまったくなかったとされているのです。幼い頃から

彼女が受け取ってきた古い伝承の多くが、島の「正統な伝承」とは大きく異なるとして、「嘘つき！」とののしられ、書きためた伝承ノートを取り上げられ、目の前で燃やされるといった激しい弾圧に耐えて生きのびてきた貴重な記憶遺産です。

研究への圧力に抗して

映画『マルモイ ことばあつめ』を見ました。朝鮮語が学校教育から消され、創氏と改名によって名前までも消されていく一九四〇年代



遠隔講義用の部屋に掲げた「生物文化多様性研究所」の看板の下で

の植民地朝鮮で、民族意識を持たせなかったため、朝鮮総督府によるしつような妨害と弾圧の中で、各地の多様な方言を含む『朝鮮語大辞典』を完成させようと、文字も読めない下層の人々までが命をかけて奮闘するようすを描いた人間ドラマです。私たちの小さな試みである生物文化データベースづくりに対するおおいなる励ましをも感じて泣きました。以下は、ちらしに載っているオム・ユナ監督の言葉です。

現実という壁にぶつかって夢見ることさえ贅沢になった今の世の中に、共に夢をかなえていく人々のぬくもりが伝わり、厳しい世の中を辛うじて一人で耐えている人たちへの小さな慰めになればうれしい。見回してみれば、共に歩んでくれる人が隣にいるんだと。

「戦争ができる国」を目指すこの国の政権が次々にくりだしてくるさまざまなたくらみ。防衛省の予算で学者たちに研究費を配って軍事的にも役立つ研究をさせることも、そのひとつです。

原爆をつくったマンハッタン計画に動員された数多くの学者たちは、本当の目的を教えられずに従事しました。そして、自分の研究

が人間の上に落とす原爆に役だったと知ったあとでも「生涯であれほど充実した時間はないかった」「本当にわくわくさせられた」等と回想したというのです。当時、勇気をもって政府に異議をとねることができたのは、シラードなどごく少数の学者にすぎませんでした。

戦争に荷担したことへの反省から、日本学術会議では、戦争につながる研究に手を染めることをしない、と何度も決議しています。その姿勢が気に入らない人たちの攻撃が、今回の学術会議が推薦した委員を認めないという態度に表れていると思われれます。現在私たちがいただいている科学研究費は、もちろん国民の血税によるものですが、学者たちの審査委員が適確と認めた公平な推薦によって選定されているのです。そのような自律的な決定（学問の自由）を、政府の都合でくつがえすことを認めることはできません。

自然と文化の多様性を抹殺しようとする、戦争につらなる動きに対して、阿東つばめ農園では非力ながらみなさんと共に歩み、声をあげ続けたいと願っています。

(つづく)

(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

✉ y@ankei.jp

http://ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

13

安溪貴子・安溪遊地

コロナ禍の中でもつながりを広めて

中国山地の山並みが真っ白に雪化粧する中を、太陽が昇ってきます。

一昨年の八月に始めた営農ソーラー。田んぼの上に、藤棚のようにパネルがひろがっている風景は、山口県では初めてのものになりました。おかげで、新型コロナ肺炎への警戒態勢のなかでも、訪ねて下さる方があって、ソーラーシェアリング仲間の広がりができてきました。地元山口県や隣接する広島県はもとより、熊本、宗像、佐賀、鹿児島など主に九州からの見学がありました。宗像市の方には、現地の農業委員会への説明資料を作ってお送りしたところ、設置が認められるという動きになったという、うれしい報告がありました。

営農ソーラーの仲間は全国にいますが、今年ももっと足もとからのつながりを、着実につくって行くことをめざします。昨年一月にスタートして現在一九三人の会員がいる、「中国山地百年会議」に参加しました。『みんなてつくる中国山地』という雑誌を毎年一冊、百年にわたって出し続けようという地域づくりネットワークです。「経済成長や効率性を追い求める社会から、人々がつながりを実感できる『地元』で生産と消費をつなぎ、資源を循環さ

せることが心地よいと感じるような持続的な社会を目指します」(<https://cs-editors.site/>)という目標は、阿東つばめ農園で日々目指していることだと感じます。

百年会議のネットワークの中には、すぐ近くの山口市阿東地福の地域拠点「ほほえみの郷 ToiToi」があります。ここからは、高齢者の安否確認もかねた移動販売車が毎週まわってきます。吹雪の日など、寒さで心が折れそうになりながら回っているという販売員の若者たちは、「あんたから買いたいんよ、スーパーまで行けばもっと安く買えるものでも」という地元住民の温かい声に支えられているそうです (<http://jifuku-toitoy.com/>)。また、つばめ農園から一〇キロしか離れていない、島根県津和野町では、「山の宝でもう一杯」プロジェクトとして、放置された山林を生かす小規模林業とバイオガス発電の新しい試みを進めています (<http://www.tsuwano.net/www/contents/1398673642733/index.html>)。

大学教員として二〇〇五年から一〇年以上「地域が学校・地元が先生」をテーマに学生を派遣してお世話になった山口県内各地の方々・地域に、「中国山地百年会議」のネットワークを紹介しつなげたい、というのが新年の抱負です。

初心に返って根を深くはる

一九九三年、鳥取県の大山の麓の村で畑と初めての田んぼをしながら一年間暮らした時、別れの日が近づくころ、村の人たちからこんなことを聞きました。田んぼや畑をゴミ捨て場にして、そこにまだまだ使えそうな立派な材木を捨ててしまう工務店があるが、そういう人は、物の心、人の心がわからん。また、ゴミ捨て場にはしないまでも、丹精こめたナシの木を切って畑をつぶすのを見ると涙が出る。畑が草山になるのは見ておれんし、田畑を荒して、あとは野となれ山となれでは、そこを耕してきた先祖に対して申しわけがないですねえなあ……。この気持ちだが、たとえ赤字でも農業を続けている原動力になっている、というのです。もうからないからと土地を放棄してしまえば、将来大水や地滑りなどの災害が起これるといふことも強く心配しておられました。すべての公務員は、少なくとも一年間は農民の生活を経験してから、仕事にかかわるべきだ、そうすれば、人間の原点からもうとちゃんと考えるようになるはずだ、という村人の言葉がすつと胸に落ちました。

それにしても、土地を荒せば先祖に対して



阿東つばめ農園から眺める雪化粧の中国山地

申しわけがない、子孫に対しても環境を守っていく責任がある、という自覚はどうやってきて、世代を越えて伝えられてきたのでしょうか。また、「よそ者」は、いつまでたっても「地の者」にはなれないのでしょうか。たとえよそで生まれても、その土地に世代を越えて伝えられてきた智恵の世界に触れることは許されているということをここ、大山の麓で学ぶことができました。実は私たちが住んだ村は、一八世紀の半ばごろ、なんらかの理由で在来の人々のほとんどが追い払われる、という事件が起きたといえます。その時に、数戸の家だけが追い払われずに残されました。田への水をどう引くか、それぞれの田の必要とする水はどのくらいか、といった水利についての知識のある人たちが追いついたのは、稲作も徴税も不可能になるからだったのです。そして、あちこちからの移住者によって村はりっぱに再建されて、それが今に連なっていたのでした。

そうであれば、私たちもまた、この土地の歴史と自然とつきあう方法をきちんと学んで、より深く根を下ろしていく努力をしなければと思います。そのようにして「地の者」への道を歩み始めたいというのが、もうひとつの抱負です。(つづく)(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)



つばめ農園おひさま便り

14

安溪貴子・安溪遊地

記録的な積雪

お正月すぎの天気はいかがでしたか。つばめ農園がある山口市阿東は、記録的な積雪となり、除雪車が脱輪したり、交通が途絶する集落がでたりしました。

三が日はまだ積雪一〇センチくらいで、毎日コースを変えて散歩に出ました。鳥たちや野ウサギの足跡に、食べ物がなく困っているだろうと気づき、くず米を雪のない軒下や、農機具用のひさしの下に撒いてやりました。田んぼの中に大豆殻を積んでおいた場所は、発酵して熱を持っていたのでしよう、そこだけ雪が融けて、直径一メートルほどの穴のようになっていますので、そこにくず大豆とくず米を多めに撒きました。それを目当てにキジ、カラス、キジバト、スズメ、タヌキなどが入れ替わりやってきました。

雪は一月七日から一〇日まで降り続け、八日には家から町に出ることも難しくなりました。除雪車を通る市道までの八〇メートルの坂道が雪でふさがってしまったのです。日中も日がささず、気温が上がらない日が続き、マイナス一〇度を下回る朝もありました。暖房によって屋根の雪が融けて滑り落ち、軒の下に

は背丈ぐらいいも雪が積み重なります。家の周りの通路の除雪と、昨年建てたばかりの長さ三〇メートルのハウスの雪下ろしに汗を流しながら「いい運動になるね」などと家族ではげましました。

寒波で、簡易水道のパイプの破断があるらしく、有線放送がしきりに「凍結防止に水を出しつばなしにするのはやめてください、近くの空き家も点検してください」とお願いの放送をくりかえしています。そこに、停電が起きました。幸いすぐに復旧したのですが、オール電化の家もあり、灯油やガスの暖房器具でも電気がなければ動かないものが多い今、積雪の中に孤立した高齢者にとっては命にかかわる事態だという心配が頭の中を駆け巡りました。幸い、つばめ農園は停電しても水が出る井戸水で、手作りのロケットストーブと風呂用の薪も乾いたものが二トンほど積んであるうえ、農家だから食料の在庫もたっぷりあって、生鮮野菜を畑の雪の下から掘り出しにいけるようにさえなれば、たとえ世間が断水と停電になったとしても、一月ぐらいの籠城も問題ないと思っていました。

営農ソーラーの倒壊

一月九日、このあたりではナガヤとよぶ農作業用の小屋の上に三〇センチを超える雪が載っているので、重みでひさしが折れることが心配になりました。傾斜が強く屋根に登ることが危険なので、防水ベニヤの板と長さ四メートルのハウス用パイプで雪下ろしの道具をつくり、下から雪を下ろすことを試みました。



営農ソーラー（ソーラーシェアリング）のパネルの上にも雪が載っていますが、高さが三メートル以上の架台の上で、配線もめぐらされていきますから、よほどの決心と技がなければ安全な雪下ろしはできそうもありません。

明けて一〇日の朝、息子の大慧が、夜中に屋根から雪が落ちるような大きな音が聞こえた気がする……と言うので家の周りを見ましたが、新しく落ちた様子はありません。貴子が、玄関の前を埋めた雪を掘って、そりで家の前の田んぼに運ぶ道をつけながら、ふと眺めると、あたりの景色がすっかり変わっていました。昨日まで建っていた、営農ソーラーのパネルが雪の下になっっているのです。みんな外に出て全体をみわたしてあせんとしました。昨夜のうちにさらに降り積もった雪の重みに耐えかねて、パネルを支えていた架台の足が一斉に折れてしまったようです。家から遠い最後の一行だけがまだかろうじて立っていました。斜面に置いた七二枚を除く、二一六枚のパネルが夜中の積雪で倒壊したのです。乗用車の屋根の上に積もった雪をおろしながらその深さを測ってみたら、五三センチほどとわかりました。大慧が夢うつつに聞

いた大きな音は、夜のうちの降雪で合計一〇〇トンほどにもなっただろうと推定される雪を載せたパネルと架台が一斉に倒れるときの音だったのです。

想像もしていなかった事態にしばらくは呆然としましたが、嘆いたり悔やんだりしている暇はありません。まずは送電のスイッチを切ります。パワコンなどの機器は無傷のようです。太陽が出れば発電が開始され、漏電があると高圧の電気が流れる恐れがあるので、配線や架台に触れないようにして、「感電危険」の表示を掲げます。お世話いただいた「市民エネルギーやまぐち」に連絡し、全国の営農ソーラー仲間へ雪害の注意喚起をするようにお願いしました。自然災害に備えた再建と、再開できるまでの間の休業補償のふたつの保険についての連絡と、6月の田植えまでをめざした様々な対応が続きます。

温暖化で海の温度が上がると空気中の水分が増えて、かえって積雪が増えるという現象があるそうです。より雪や風に強い形での営農ソーラーの再開をめざす足取りについては、随時ご報告しましょう。

（つづく）（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

✉ y@ankei.jp

📖 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

15

安溪貴子・安溪遊地

山口市北部の阿東では、二月に入っても、三〇センチの積雪があったりして油断はできませんが、しだいに暖かさを増してきました。農機具のメンテナンスや、田んぼの排水溝を掘ったりする耕作の準備作業を急がなければなりません。

つばめ農園の周りでは、梅が少しずつ花をつけ、フキノトウがむくむくと芽を出しはじめました。鳥たちにもぎやかに、数百羽のミヤマガラスが水田にあらわれて、朝鮮半島への旅立ちにそなえています。積雪で送電の止まった宮農ソーラーの電線に、ヒレンジヤクらしい群れがとまっています。

春節が終われば、中国から宮農ソーラー復興の資材費の見積もりが届く予定です。次の号では、修理の写真も掲載できると期待しています。

手をつなぎ立ち上がる女性たち

コロナ後の社会は、コロナ前に戻すのではいけません。感染症の発生と感染拡大の背景にある、過密社会とそれを支えてきた大量生産・大量消費を根本から見直し、生物多様性を回復させる新しい生き方ができるかどうか

が、人類の運命の分かれ道です。そんな持続可能な未来を予感させてくれる集まりが山口市でありました。

二〇二一年二月一四日、山口市民会館の小ホールで「命と土がつながる給食」をテーマにフォーラムを開催しました。主催の「ヤツタネ! やまぐち」は、食と農に関心の高い母親たちが「こどもたちの未来のために」という共通の目標をもって集まった団体です。今回は「土は子どもの命そのもの! 生きる力を育む食育」をテーマに、県内の会員が登壇して語りあいました。新型コロナ肺炎予防のため一〇〇人に抑えた定員が満員御礼となった会場のみなさんを巻き込んで、有意義な意見交換ができました(動画 <https://youtu.be/1qNHEuHxBkQ>)。

パワフルな牽引役の食育指導士うつきーと秋本葉子さんは、自作の漫画を見せながら、有機農業の畑の土と人間の腸内の細菌は共通することから、土の中のちいさな命を壊さない生き方の大切さをうったえました。野菜作りをする湯田・管内幼稚園の阿野久子園長は、子どもたちの足腰が強くなり、泥んこ遊びにも慣れて、庭のキンカンをもいで食べるようになって風邪を引く子どもが減ったという印

象を報告されました。

安溪貴子は、一九九〇年からの自給農業、原発震災で始まった阿東つばめ農園への歩みを紹介。アメリカの子どもたちが食べ物によって病気にされていること、遺伝子組み換えと除草剤グリホサート（ラウンドアップ）が原因と気づいた母親たちが手をつないで立ち上がる『UNSTOPPABLE（あきらめない）愛する子どもの「健康」を取り戻し、アメリカの「食」を動かした母親たちの軌跡』（二〇一九年、現代書館）を紹介しました。

山口市の山村のひとつ仁保地区のPTAの古瀧（きょうたき）映美さんは、「大楽（だいがく）・古民家（こみんか）レッジ」と名

（西村郁子さん撮影）
男性はもっぱら「縁の下の力持ち」です。



付けた築一五〇年の茅葺きの家で子育て真っ最中。高校生の時に留学し、その後働いていたハンガリーでの暮らしを紹介。欧州からの旅行者向けのパンフに「日本の野菜は農薬汚染がひどい」と書いてあることは知っていたものの、野菜を炊いて塩を入れるだけでおいしいハンガリー風スープが、日本の野菜ではどうやってもできないことを知ったショックを語りました。「給食は大切な子どもの命を委ねること」と、有機給食の導入への期待を話されました。

農薬も除草剤もつかわないで二〇ヘクタールの田んぼをつくる倉重智子氏さんは、お母さんの再生不良性貧血発症がきっかけになりました。ホースの先をもって田んぼを歩き、農薬で真っ白になるのは女性でしたから、慢性的中毒を疑って、無農薬の玄米正食を実践。本物の無農薬米がなかなか見つからないので、自分たちの水田のすべてを完全無農薬栽培に転換することに踏み切りました。売れる米がいただけるようになったのは六年目からだったけれど、お母さんの病気がすっかり良くなっていました。新山口駅前の一等地にあるおむすびの店「結び家（や）くらとも」誕生秘話のあと、昨年、周囲の農家が壊滅的な

ウンカ被害を受けるなか、二〇ヘクタールまとまっているためか無農薬米の田んぼは一切被害がなかったという、うらやましい話もありました。

最後は管理栄養士で周南市で県産食材を使ったカフェ「百日紅（ひゃくじつこう）」を運営する平井多美子さんと、給食を変えるには、まず学校の栄養士に有機野菜を味わってもらうことが大事で、「有機野菜は皮まで食べられて台所からのフードロス削減にもつながる」と話しました。

会場では、その後、宇部、山陽小野田、防府、周南、岩国、下関と山口県内各地からの参加者の活動紹介と、今後たがいに連絡をとりたいようになるための交流の時間もとりました。

最後に、参加者ひとりひとりが山口市長あてに手紙を書き、参加してくれた市議員のみなさんに託して、フォーラム後のパワフルな働きかけにつなげました。具体的には、「山口市の子どもたちにゆうき給食の日をプレゼントして！」という署名活動を紙とネット（<http://ankei.jp/yujij/?n=2504>）で進めています。（つづく）（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

✉ y@ankei.jp
BLOG <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

16

安溪貴子・安溪遊地

遠くてもつながられる

つばめ農園から歩いて行ける徳佐八幡宮の参道を埋めつくすしだれ桜が、昨年より一〇日以の上早い三月二〇日に満開でした。山々にも白いぼんぼりのようなコブシに続いて、山桜が咲きました。早生のコシヒカリをつくる田ではトラクタがうなりをあげはじめました。

ツバメはやってきましたが、気がかりなのはミツバチがいないことです。例年なら三月にツバチの花を訪れるニホンミツバチもセイヨウミツバチもまったく見られません。チョウの仲間も、モンシロチョウとツマグロヒヨウモン、ヤマトシジミが、多くても三頭、たいてい寂しく一頭です。どうなってしまったの？ ツバメたちの食べ物はあるの？ と、心配になります。

縁あって先進地長野の「有機農業研究会第四回大会——コロナ禍の先を見据えて」にオンラインで参加できました。長野市の標高九〇〇メートルのところからのメールには「雪も完全に消え、ニラの芽も一五センチぐらいに伸び、草花も花を咲かせる季節になりました」と、全国の方々との「農ある暮らし」の共有の喜びが綴られていました。遠くても、簡単につながれるようになったのは、コロナ禍の中での希望です。

有機農地四〇倍増加計画

対面での交流も続けています。二〇二一年三月一日には、防府市に山田正彦元農林水産大臣をお迎えして、第三〇回山口県環境保全型農業フォーラム「売り渡される食の安全——いま山口県でできること」を主催しました。さまざまな参加者が新型コロナウイルス対応をした会場いっぱいに来て下さいました。中でも『長周新聞』は、まるまる二面を使ってくわしい記事を載せてくれました (<https://www.chosyu-journal.jp/seijikeizai/20598>)。

山田正彦さんのお話は、昨年暮れの臨時国会で強行採決された「種苗法改定」に対する全国の農業者の声の紹介から始まり、除草剤グリホサート（ラウンドアップ）の発がん性や、国と対等の地方自治体からこそできることがあることへ展開されました。

その中で、三月五日の全国ニュースで報道された、農水省が「二〇五〇年までに日本の有機農地の面積を四〇倍に広げ、全耕地面積の四分の一にする」という「みどりの食料システム戦略」を五月までに決定して、九月の国連食糧システムサミットで発表するという、有機農業者のほとんどにとっては寝耳に水だった政府の動きについて、以下のように警告されました。



有機農業を全耕地面積の二五%に増やすとは素晴らしいと思われた方もあるでしょうが、内容をよく読むと「ゲノム編集の種子」を活用してと書いてあるんです。農水省が考えている有機農業は、遺伝子改変技術を用いるものだから充分気をつけないといけません。

マスコミ報道の情報が少ないために、あやうくだまされるところでした。山田正彦さんの励ましを受けて、「日本の種子を守る会」とつながる「山口の種子を守る会(仮称)」の結成へ向けて走り出しながら、まず、三月二

九日に公開された、農水省の「みどりの食料システム戦略・中間とりまとめ」を読みました。以下がその抜き書きです。丸かっこ内は、私たちの補足です。

いわゆる「スマート農業」の流れでしようが、例えばドローンが大豆畑に発生しているヨトウムシを見つけたら、そこをピンポイントで自動的に農薬散布する技術や、見つけた虫をレーザー光線で殺すロボット。斜面も走れる除草ロボットの普及とロボット用に(棚田では田そのものがなくなりかねない)土手を緩やかにする土木工事。(遺伝子改変技術を前提とした)主要病害に対する抵抗性を有した品種の育成。(現在新型コロナウイルスワクチンで大規模人体実験中の)RNA農薬の開発。(1グラムの土壌に多ければ六万種類もいるという)土壌微生物機能の完全解明とフル活用による減農薬栽培の拡大。(これまでついに実現できていない)病害虫が薬剤抵抗性を獲得しにくい農薬の開発。先端的な物理的手法や(遺伝子ドライブなどの)生物学的手法を駆使した害虫防除技術等々。案の冒頭の営農ソーラーと電動トラクタの組み合わせならつばめ農園でも数年内に可能ですが、計画が未来に近づくほど、ほとんど、高速増殖炉や核融合の見果てぬ夢を語る人びとのような筆致です。

遺伝子ドライブというのは、ゲノム編集で開発されたCRISPR(クリスパー)技術を応用して、メスを不妊化する遺伝子をすべての個体に広げて、数世代のうちにひとつの種(しゅ)を丸ごと絶滅させることができるという、一歩間違えば取り返しのつかない技術で、ビルゲイツ財団の資金でアメリカでマリアを媒介する蚊を対象に野外実験が行われ、最近ではイギリスに侵入した外来のリスなどを対象に実験がくりかえされています。

山田正彦さんの警告以上に、SFまがいのAI頼みのオンパレードという問題だらけの計画でした。なによりもいけないのは、これまで日本の有機農業を牽引してきた、草の根の農民や、地域での息の長い取組の産んだ先進的な事例をほぼ無視する形で、トップダウンでわずか数か月のうちに物事を決めようとする姿勢です。

日本有機農業学会の研究者たちが、取りまとめた批判的な見解は、具体的にたいへん説得力があります。二〇二一年三月末までの状況をブログ記事にまとめておきました。

<http://ankei.jp/yuji/?n=2512>

(つづく)(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

 a@ankei.jp
 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

17

安溪貴子・安溪遊地

春はかけあしで

桜の開花が例年より一〇日も早くて驚いた春の始まりでした。山々が緑に染まるコナラの芽ぶきも一週間以上早く、もう藤の花が咲いています。「今年の田んぼのゆくえはどうなるのかねえ」といつつ、草刈り・耕運・代かきの農作業があちこちで始まりました。一年で最も多くの人影を田んぼにみる季節です。地域では最年少だったつばめ農園の当主・大慧に加えて、今年は農作業に二〇代の若者の姿も見えるようになっていきます。がんばりすぎずに長続きするように応援したい気持ちです。

お米や大豆だけでなく、野菜も種子を自分にとって保存し、それを播いて育てる。そんなことを始めているので、春は種まきの季節でもあります。お師匠さんにもらった紫色の粒のトウモロコシ、瀬戸内海側の防府市富海で友人にもらったタデアイヤチシャをまき、畑に移植しました。いまはいろいろなトマトの品種の種子を根が出るのを待って、ポットに植えているところです。まもなくキュウリやカボチャ、ラッカセイも続きます。

新学期になって、大学での授業も始まりました。貴子の生物学の授業では、医者をめざす学生たち一〇〇人以上に教えていますが、今年度

は教室での対面で始まっています。実際に外を歩いて、草花を観察するという授業もあります。そのような体験型の授業の効果は素晴らしいのですが、新型コロナウイルスの広がりの中で、いつまで対面授業が続けられるのかわからない状況です。

大雪で倒壊した宮農ソーラーの方は、保険の対応と市民エネルギーやまぐち(株)、環境エネルギー政策研究所(ISEP)の全面的なご支援を受けて、五月中に倒壊部分の撤去と、より雪に強い構造での再建へ向けて、動き始めました。六月の田植えには間に合うように再稼働ができる流れになったことにひと安堵しています。

使えなくなってしまったソーラーパネルの行く先が気になります。まだ使えるものや部品はリユースして、例えば「つばめ農園おひさま交流館」に設置したようなバッテリーに溜めて電力自給・自立型生活ができれば理想的です。割れたり歪んだりしたのは、山口県から近い北九州市にそのリサイクルを専門とする業者があり、枠のアルミ、表面の強化ガラス、シリコンの発電素子とケーブル、ガラスを接着しているプラスチックに分けて、それぞれに有効利用できるとなシステムが構築されています。

雪で曲がってしまったアルミの架台や、田んぼにねじ込まれたスクリーン状の金属杭も、地

元に戻業者がいて引き取りに来てくれます。性能保証の予定年数(パネルは25年と言います)が来ても、事故で壊れても、リユースやリサイクルが可能です。これは、原発やダムや巨大風車とちがって、手の届く技術で処理できるところが大きな利点です。

メガソーラーの太陽光パネルや、高さ一五〇メートル近い巨大風車が耕作放棄地や山を埋め尽くし、発電した売り上げは都会の大企業や投資家に吸い上げられるというのでは、「明るい未来のエネルギー」にはなりません。地域の農業と環境を守りながら、自給的経済の柱として地域のエネルギーとお金が地域で回るといふ、ソーラーシェアリング(営農ソ

連休に読もうと買い込んだ南の島の人と自然の関係の本。タンガニイカ湖畔で一緒に読んだ畏友・山岡耕作さんの大冒険録『黒潮源流シーカヤック遍路旅』(南方新社)は楽しみな一冊。



ラー)の可能性を引き続き追究したいと思えます。

新しい勉強へ

わが家の三人は、親代々の共通の困った習性があります。それは、後先を考えずに、寝る場所もなくなるほどじゃんじゃん本を買い込むことです。

遊地と貴子は、これまで、専門の人類学と生物学、地域で言えばアフリカの本や奄美・沖縄・台湾の本などが多かったのですが、四月に入って、急にさらに南の島々の本が増えてきました。まずは日本語の本からです(写真)。実は、新しい研究プロジェクトに二人で入りませんか、と若い友人に誘われて、ふらふらと引き込まれたのです。内容は、これまで勉強してきた奄美と沖縄の島々での人と自然の関係を、とくに水の循環に注目して掘り下げてみよう、さらに、サンゴ礁でつながるミクロネシアの島々、自然も文化もあまりにも多彩で目くらむようなインドネシアの島々について、足もとから地続き・海続きのグローバルな環境問題をめざす視点からみなおしてみようという意欲的なものです。実際に訪ねられるのは数年後としても、なに

かお手伝いできることがあるかもしれないと思つて飛び込んでみることにしました。

地球環境問題は、いくら理科系の研究を積み重ねても、それだけでは解決の糸口が見えませんでした。それは人類の文化とそれに基づく行動そのものから引き起こされてきた問題だからです。これまでにない切り口から、足もとの問題と世界の問題をつなぎ、専門というたこつほを、地域の人たちとともに楽しく爆破して、人びとの生き方そのものが変わることにつながるような取り組みをしよう。そんな意欲的な目標をかかげて、二〇年前の二〇〇一年四月に創立された、文部科学省としては最後となる直轄研究所「地球研」の新しいプロジェクトです。正式名称は、総合地球環境学研究所ですが、英語名は、Research Institute for Humanity and Nature、つまり人間と自然の研究所と称しています。

つばめ農園での着土の暮らしを、生物多様性と文化多様性の減少というグローバルな問題に直面する南の島の人びとの暮らしや思いとつなげてみたい。そんな夢をもつて、新しい勉強を始めています。

(つづく)(あんけいたか・あんけいゆうじ)

✉ a@ankei.jp

🌐 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

18

安溪貴子・安溪遊地

鳥たちの動静

山口県は、平年より二〇日も早い梅雨入りとなりました。気温がなかなかあがらず、苗代におろした苗もようやく育ってきたところで、田植えは六月上旬の予定です。

ツバメの雛が孵りました。巣の下にたまごの殻が落ちていたのでわかります。育つてくるとへびに襲われることが多いので、へびよけにうちでは吸わないタバコを買ってきて、巣のまわりに貼り付けました。巣立ちまでカラス、へび、ネコなどに気が抜けません。

高原のここでは、春先からウグイスやホトトギス、竹筒をポンポンと叩くようなツツドリが鳴きますが、きょうはカツコウもやってきました。アカシヨウビンもこの季節です。代掻きをするトラクタのうしろをコサギ、チュウサギ、アオサギなどが歩くのがみられます。「月日星ポイポイポイ」とさえずるサンコウチョウや、数年前にはコウノトリまで来たことがありました。セグロセキレイ、ヒバリ、カワラヒワなどもあります。年中いるのは、スズメ、二種類のカラスと木を叩いているコゲラ、田の畦のキジとフクロウです。なぜかヒヨドリは少なめです。樹林の小鳥たちや猛禽など、ほかにもいろいろいるのでしようが、いまは耳にとどくものたちだけ。

アフリカ料理に学ぶ

自然がいつばいの阿東つばめ農園で、食べ物とエネルギーの地域自給をめざして暮らし始めたそもそものきっかけは、原発震災でした。しかし、実は、コンゴ民主共和国の森の中の村で、村長の養子とその妻という立場で、一九七〇年代の末に一年弱を暮らす中で受けた、地域自給の豊かさとその知恵に出会った衝撃がその背景にあります。

大きな森の中の人口一〇〇人ぐらいの村での大家族の生活のなかで経験した、自給による生活の素朴さと多様さ、その知恵の広がり。貴子は自給する料理のおもしろさに惹かれ、料理の全体像を知りたいと思いました。二人の主婦にノートを見せて三人で手順や名前を確認し、時には呼び名を考えたりしました。このノートをたずさえて、一九八七年から一年半、パリの植物園内にある自然史博物館の民族生物・地理学部門の研究室の仲間に入れていただいて、流行のやり方でつまみ食いをするのではなく、ひとつのフィールドに何十年と腰をすえて全体像を把握することをめざす、息の長い地道な研究方法を学びました。

「料理の全体像を捉える」そこにはソングーラ

右：キャッサバ芋を毒抜きした粉をふるう
 左：キャッサバの葉を臼でつく
 (いずれもソンゴラ人の料理手帖から)



の主婦が食を自給するための考え方や方法が見えています。といっても「全体像」を日々の暮らしの中で意識しているわけではありませぬ。手帖にすることによって、一年中飢えないで食べる、という基本を満たしながら、いろいろな料理を食べて楽しむ、そんな工夫の実体が見えてきました。

自給生活の中で多様な料理を楽しむ背景には、焼畑での栽培だけでなく野生動植物の種類が多いことがあります。料理法の工夫も大きいことがわかってきました。一九六〇年の独立直後のコンゴ紛争後期の内戦（一九六三～六五）のときには、「森のなかに逃げて暮らした」といい、野生の豆の木の実やヤマノイモの仲間を毒抜きして食べた話もきました。

コンゴの森の民の料理の世界をまとめて、貴子が一九九〇年に出版したのが「ソンゴラ人の料理手帖」でした(<http://ankei.jp/taikoku/?n=65>)。三〇年前の料理手帖では研究誌の特集号として出版していただいたこともあって、女性たちのもつ膨大な経験と知識の内容を英文と表と挿絵で書き記すところでも、もっとわかりやすく伝えたいと願っていました。

ソンゴラの人たちは一九九〇年代に始まった内戦とアフリカ大戦のなかでインフラが崩壊しています。二〇一九年に、私も何十年ぶりの「里帰り」をめざして旅立つ準備をしたのですが、エボラ出血熱が出たことで渡航中止となりました。いまだどうやって暮らしているだろう。そう思った時、なにがあってもまた森のなかでずっと生き延びてい

くれるだろう、と思ったのです。そのことは、料理手帖をまとめることで実感できたし、グーグルアースで森のなかに焼畑が行われていることを確認することもできました。

二〇二一年五月後半に、アフリカ地域研究のさまざまな発表ができる日本アフリカ学会の年次大会が、コロナで対面ができないためインターネット会議の形で開催されました。「アフリカの食文化」に焦点を当てたフォーラムで貴子が「塩を買うだけで二一〇〇種類の料理をつくる——コンゴ民主共和国・ソンゴラ人の食の多様性によるレジリエンス（しなやかさ）」というタイトルで発表をしました。

この多様な知恵が社会の強靭さを支え、森のなかに逃げて暮らすときにも役立ったのです。一方、足元の日本の食をみると地域自給も国としての自給もできていないことが明らかです。新型コロナウイルス禍のなか、基本的な食糧を自給できないことの危うさ、できなくなったときどうすればいいかも考えたいと思いました。そこで、発表の最後に私もがアフリカの経験をきっかけに土と出会い、つばめ農園で家族農業を始めていること、おひさまとともに暮らす日々の学びの大きいことを紹介しました。

(つづく) (あんけいたかこ・あんけいゆうじ)



つばめ農園おひさま便り

19

安溪貴子・安溪遊地

営農ソーラーの再建

つばめの雛六羽が無事に巣立ちました。しばらくは家の軒下で餌をもらっていましたが、自分で餌がとれるようになって、両親は新しい巣づくりを始めています。

ソーラーシェアリングの雪害からの復旧が二〇二一年六月二日に完了し、田植えに間に合いました。以下に、事故から再建までのみちのりを記録しておきたいと思います。

現在使っている三四馬力のトラクターの高さは二メートル、三五馬力のコンバインは高さ二・五メートルです。もともとの設計では余裕をみて地表から高さ三メートルまでの空間を農業機械が通れるようにしてもらいました。通路側には筋交いが入っていなかったため、台風の際には、気休めに柱にロープを一〇本ほどかけてみたりしていました。

今回雪で倒れた本体部分は、ソーラーパネルの地面との角度が5度という、ほとんど水平に近い設計でした。山口県ではもっとも雪深い阿東ですから、もう少し角度をつけられないかと現場で聞いたのですが「それには部材を取り寄せて追加しなければなりません」という返事に、断念しました。両面ガラスのパネルなので、雪が降っても、日が射せば雪に反射した光が下

からあたって、発電を開始するので、その発熱で雪は融けて落ちるでしょう、という業者の説明に期待をつなぎました。

二〇二一年一月上旬、阿東では大雪が続いて降り、何日も太陽が姿をみせないまま、しだいに積雪量が増えていきました。湿気を多く含んだ暖地の雪は、パネルの上に積み上がり、一枚一枚のソーラーパネルの外側に五〇センチずつほどはみ出していました。一方、長さ三〇メートルのパイプハウスは、半年ほどかかって自力で建てたものですから、雪でつぶされたら大変と思って、大きなトンボのようなものを作って外から下ろしたり、中から押して雪を落としたりといったケアを続けました。一月九日、積雪が五〇センチを越えた時には、物置小屋のさしかけ屋根などが折れるのではないかと、雪下ろしを試みました。でも、ソーラーパネルを支えているアルミの架台が全体の重みに耐えかねていることにはまったく気づきませんでした。

積雪が七〇センチに近づいた一月一〇日の未明、架台の足もとの部分が、固定してある杭の上三〇センチほどのところで一斉に折れて、パネルも地面に投げ出されました。倒れたことに翌朝起きて初めて気づいたのでした。

もしも積雪で営農ソーラーがつぶれることがあるという意識があったら、リーフなどの電気



図1：雪で倒壊したソーラーパネル（2021年1月）

図2：再建された宮農ソーラーの下での田植え（2021年6月）



自動車の五台分という高価な施設ですから、なんとか守ろうと、夜中でも雪下ろしを試みていたかもしれません。そして、もしも総重量一〇〇トンにもなっていた雪の重みで柱が一斉に挫屈した瞬間にパネルの下に居たら、逃げる暇もなく、居場所によっては圧死しないし体を挟まれて動けない状態で凍死というようなことになっていただろうと思います。無知が幸いしたのでした。

日が射して雪が融ければ、たとえ割れていてもパネルは発電を開始します。パネルからの電圧は、八〇〇ボルト以上です。もし漏電

していたら、架台に触れるだけで危険です。まずパワコンのスイッチを切り、立ち入り禁止のロープを張って、保険屋さんご連絡しました。

被害の査定の人が広島から来て、残雪をかき分けながら三時間ほどかけて丁寧に見てくれました。杭は少し傾いたものや上端が曲がったものもありますが、パネルの多くは無事のように見えます。

ずっとお世話になっている市民エネルギーやまぐちの力を借りて、再建業者を探してもらいました。一般の建造物は、阿東では一七

〇センチの積雪に耐えるように設計されるのだそうですが、パネルの角度を三〇度と大きくして雪が落ちるようにし、六〇センチまでの積雪に耐える強度にすることにになりました。

パネルなどは、二年前と同じ特性のものももう製造

されていないということで、結局全部交換ということになってしまいました。杭も、一八〇センチから二二〇センチのより長いものにして強度を高める設計です。

火災保険では、もとの通りに復旧するお金と、片付けの費用しか出ません。より丈夫なものに建て直すための差額は自己負担です。ここでもありがたいことに、市民エネルギーやまぐちの支援をいただくことができることになりました。

材料を中国に発注し、それがそろってから工事にかかるという計画ですが、田植えに間に合うようにお願いをしました。地元の農業委員会には、杭の太さと本数が同じですから、届けだけで許可の更新は不要でした。

工事の人たちにとって大変だったのは、梅雨が始まってしまつて、予定地が一挙に田んぼのどろどろになってしまったことでした。泥がつけば拭き取らなければなりませんし、最後のパネル挙げは、足をとられないように、なんと長靴を脱いで裸足でやってくださいました。

パネルの角度が大きくなつて、風の影響を受けやすくなつた分、巨大台風の直撃がないことを祈っています。

(つづく) (あんけいたかこ・あんけいゆうじ)



つばめ農園おひさま便り

20

安溪貴子・安溪遊地

早い梅雨明け

山口は七月一三日に、昨年より一七日早く梅雨明けしました。オニユリやムクゲの花が咲き、ウスバキトンボやシオカラトンボが飛んでいます。日差しが強いので、我が家は毎朝七時には農作業開始です。連日の晴天に、稲はぐんぐん生育して、水面が見えなくなりつつあります。雑草を抑えるために始めは水を深めにしていたものを、水を切って土を乾かし、排水を促すために「溝切り」をしました。

中国山地を背景に、緑の絨毯が広がる、ここ徳佐高原ですが、S Lやまぐち号は、二〇二一年は、牽引する蒸気機関車（C 57の一号機とD 51の二〇〇号機）の検査・修繕のため、ディーゼル機関車による牽引で観光列車 DLやまぐち号として運転が始まりました。コロナ禍で、わが家も山口線を利用する頻度が減っていて、存続を心配していますが、観光列車のお客はそれなりにあり、カメラをもって沿線に詰めかける「トリテツ」さんたちの車もずらっと並び始めました。

ツバメの警戒警報と天敵

梅雨明け間もないある日の午後、ツバメたちが集まっていました。前にうちを巣立った若鳥たちが挨拶に来たのかと思っ、声をかけていましたが、二〇羽ほどもいて数が多すぎます。羽根を激しく羽ばたかせて、いつもとは違う鳴き方で鋭く鳴きながら、つばめ農園の玄関の前を飛び交っているのです。ふと巣を見上げると、そこから口を開けて顔を出しているものがあります。大きく開けたひなの口より二倍も幅のある口です。どうやって這い登ったものか、やや金色をした青大将が巣に顔を突っ込んで、ひなをいくつか丸呑みしたらしいところでした。

数年前に巣が自然に落ちてしまった時も、その直後にたくさんのツバメがこんな風に集まってきたのでした。早く気づいてやればよかったです。居合わせた遊地は、慌てて手近な棒で蛇の頭を叩きました。蛇は逃げましたが、力あまって巣まで叩き落としてしまいました。拾い上げてみると、まだ四羽ほどの雛が生き残っていると、まだ四羽ほどの雛が生き残っていると、以前の自然落下の時は、急いで



拾い上げて、丈夫なテープをねじ止めして元の場所に支えることができたのでした。今度は、巣が壊れてしまつてその手は使えません。手近にあった代用品は、ポリエチレンの漏斗だけでした。それをねじ止めて、巣の中の枯れ草と一緒にひなを戻してやりました。屋根の下の蛇どめの板が小さかったのだからと考えて、板を増設しました。

一応これでよしと考えて、草刈りに出かけました。三〇分ほどで戻つてきてみると、ツバメたちの警戒体制が続いています。なんと「まだ食べ残しがあったはず」と言わんばかりに戻つてきた青大将が、巣の真ん

前の電線にとぐるをきつちりと巻いて、そろそろと頭を伸ばすところだったので。五〇センチほど離れています。そのぐらいい空中に体を伸ばすのはなんでもないことのようにです。遊地は、残されたひなを守るために、草刈り機でこれを切り殺しました。長さ一メートル半を超える大物でしたが、梅の木の根方に置いて手を合わせました。

親鳥は、自分たちの手作りの巣が急に変わつてこなブレハブの家になつたのを警戒して、近づいても覗き込もうとはせず、餌をやるそぶりを見せません。やきもきしながら祈るしか仕方がない状態でした。親鳥の代わりをして、人間が餌をやるとすれば何をやればいいのでしょうか。ミミズはだめかな、などと考へながら、インターネットを見たら、許可をもらつて育てた経験がいろいろ載っていました。うちのツバメは、それでも夕方には、少しずつ餌を運び始め、翌日には平気で漏斗の巣にも止まるようになります。こうして、結局三羽が生き延びたのですが、巣立ちまでには、まだまだ波乱がありそうです。

つばめ農園では、蛇が主な天敵ですが、ご近所に聞くと、カラスも家の中まで入つてひなを食べるそうです。猫を飼っている

家では、出入りする親鳥をテーブルの上から飛びついて獲ることもあるとか。

しかし、実は、今ではツバメの生存を脅かす最大の存在は、人間であると言わざるを得ない状態です。奄美や沖縄に年中いる同属でやや小型のリユウキウツバメとは違って、ツバメは、はるかな旅を重ねる渡鳥です。二つの生育地の両方が、健全な環境でなければならぬのです。一九九〇年にコンゴ民主共和国の森の村に滞在した時、「ツバメをゴムのパチンコで撃ち落とすして食べたんだけど、足にこんなものをしていたんだよ」と見せられた足環には、ブダペストの文字が刻まれていました。はるかハンガリーから飛んできて食べられてしまったのでした。日本野鳥の会によると、近年田畑が減つたこと、西洋風の建物が増えて巣がかけにくく、ツバメの繁殖が減っています。そして、日本では非常に強力なネオニコチノイド系などの農薬がツバメの餌である昆虫を激減させていることも大きな問題だと感じています。

(つづく)

(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

  a@ankei.jp
<http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

21

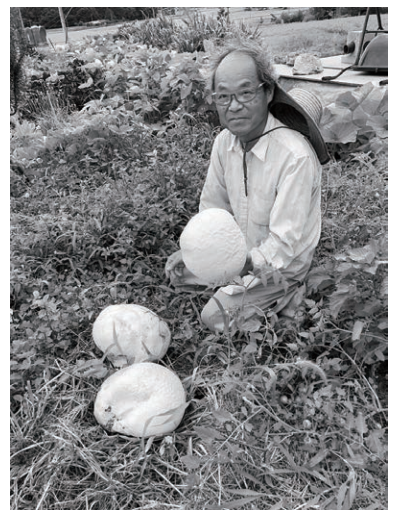
安溪貴子・安溪遊地

日照りから長雨へ

全国的な豪雨で被害を受けられた方もおありと思います。心からお見舞いを申し上げます。その前には二週間も雨がなくカンカン照りが続いたのでした。大豆に花がつく大切な時期なので、水路から水を入れたり、野菜畑に軽トラックに載せたタンクで水を運んだりしていましたが、今度は排水に苦労させられています。

つばめ農園の大豆は、種まきが密になって株が密生すると、無農薬だけにたちまち虫や病気がつきます。そのため、除草しながら根気よく間引いていくという作業が続きました。一方、隣接する自給用の野菜畑では、こぼれ種からひとりでに生えてくるものも大事に育てています。肥料をやらずとも、人が世話をしなくても育つ、たくましい性質を持ったものが出てくる可能性があるからです。

家の前の畑の、台所の生ゴミと草を積んで堆肥を作っている一画から芽生えたカボチャは、大きな葉を広げて蔓を伸ばし、土手に広がっています。その葉の下に、白く丸い、赤ちゃんの頭ぐらいのものが見えた



オニフスベが3つも出てきました

のですが、カボチャではありません。キノコです。昨年は直径三〇センチほどに育つたのを放っておいたらたっくさんの胞子を出しました。これが畑一面に出る光景を想像したら不気味ですね。それで、今年は胞子ができる前の若いうちに採ってみました。ネットで調べてみると、オニフスベという種類で、味は薄いけれど食べられるというのですね。味見してみましようか。

大学生とともに学ぶ

今年も、学生実習で山口県立大学の学生が通って来てくれています。幸い晴れ間の多かった午前中は、お互いの距離を確保しながら長靴で田の中を歩いて、ヒエを取る

という作業をしてもらいました。黙々とよく働いてくれましたが、半袖で来てしまった男子学生は、両腕全体がイネの葉で細かく切られて真っ赤に腫れてしまいました。ドクダミの花やスギナの葉のエキスを塗ってあげましたが、農場では長袖での作業が基本です。午後は、雨降りの場合を想定して準備してあった、ハウスの中のブドウの棚づくりと、虫除けネット張りなどをしてもらいました。

新型コロナウイルスの流行の前までは、毎年のように、大学生たちの実習の引率で台湾を訪問していました。山口県と台湾を結ぶ様々な絆のおかげで、台北市の台湾大学図書館や、南部の嘉義市や阿里山での1週間以上の訪問をさせていただきました。

そんな中から、戦後も台湾に残った日本人の大学教員の思い出を『榕樹文化』という日本と台湾を結ぶ同人誌に連載させていただく機会をいただいています。最近まとめたのは、台湾生まれの小澤太郎山口県知事の依頼で、台湾から帰国直後の一九五七年から、山口県の農業顧問として指導にあたられた広島県福山市生まれの磯永吉博士についての記事です（印刷中）。磯永吉は、蓬萊米（ほうらいまい）と命名さ

れた日本型の稲を台湾で育てるために尽くした功績によって、生涯にわたって中華民国政府から毎年二〇俵（一二〇〇キロ）のお米を贈られました。台湾では「蓬萊米の父」として、その名前は、八田与一の名前とともに広く知られています。八田与一は、嘉義市の西に広がる一五〇〇平方キロを超える広大な耕地を灌漑する嘉南大圳（かなんたいしゅう）を建設し、烏山頭（うさんとう）ダムは観光名所にもなっています。その業績を単行本で紹介した古川勝三さんのブログは、台北帝大教授としての磯永吉が、「台湾全土が研究室である」と台湾中に足を運び、「大地が教室である」と現場を大事にした、と記しています（<https://www.nippon.com/ja/column/s00446/?pnunm=3>）。私どもも、山口県立

大学で「地域が教室」「地元が先生」「キャンパスは地球」という目標をかかげて、学生が地元の方とともに考え、ともに汗を流す実習を創ってきました。昨年福山市で行われた磯永吉展で示された「農業と道徳」と題する、磯博士の遺稿を読んで、家族一同深い共感と大いなる励ましを感じました。この文章が掲載されている『磯永吉追想録』は、磯博士の『蓬萊米談話』な

どとともに、台湾の磯永吉学会のサイト <https://www.isohouse.org.tw> で全文を読むことができます。

いかなる農夫も作物に対する限りただ誠あるのみで虚偽は許されない。故に人を道徳的にならしめる。木石を相手にする工人にも道徳が与えられる。物のみでなく生命をも相手にする農人が愛なる要素を加えてさらに人間性を豊かにする。農人は求めず意識せずして道徳を授かる民族中の恵まれた階層であり、農業は道徳を育てる。それにより民族の健全性が保たれ「農は国の基」となる。其の道徳教育は可能であり技術訓練の中にも生まれる。このことは教育を科学する現代の教育方法にとりて一考を要することと思ふ。

『榕樹文化』のこれまでに掲載した記事については、この記事末尾のブログで検索していただくとお読みいただけます。

（つづく）
（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

 a@ankei.jp
 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

22

安溪貴子・安溪遊地

陸上イージスミサイル基地から 巨大風車へ

八月の長雨に続いて九月も曇りと雨の日が多く、青空がうれしい今年の秋です。山口市阿東高原では、早稲のコシヒカリの収穫が終り、晩稲の酒米・山田錦が色づき始めました。去年のようなウンカの被害はなく、うちのイセヒカリもまもなく収穫です。大豆畑の草取りと間引きの毎日、枝豆を堪能する日々です。そんな農的な暮らしのかたわら、私どもは、中国電力の上関原子力発電所の予定地が生物多様性の高い「奇跡の海」なので、いい加減な環境調査で埋め立てていい場所ではないという立場から、日本生態学会を主な舞台に一九九九年から保全活動をしています。

山口県と秋田県にイージスという名前の、巡航ミサイルも発射できる基地を作る計画があったのを覚えておられますか。ここ阿東も予定地の萩市むつみや阿武町から近いことから心配していましたが (<http://ankei.jp/yuji/?n=2345>) 幸い中止になりました。ところが、二〇二〇年七月に阿武町にHSE(日立サステナブルエナジーを改称)による風力発電所建設計画が来ました。高さ約一五〇メートル、ひとつ四二〇〇kWの風車を最大で二三基、尾根の上に建てる

という山口県内で最大規模の計画です。二〇〇五年に私どもが見た再生可能エネルギー導入でEUのトップランナーのスペイン・ナバラ自治州ではひとつ六六〇kWでしたから、近年の巨大化がわかります。環境影響評価が必要です。その第一段階の「配慮書」を見て驚きました。風車の具体的な設置場所もアクセス道路も書いてないのです。工事中のことは、配慮書では評価の対象としなくても書かれています。そもそも配慮書とは、事業を実施する・しないを含め、複数案を検討するためのものです。それなのに、複数案を設定しないことになっているものでした。これらの不備は二か月後、貴子も委員だったことのある山口県環境影響評価技術審査会の答申に基づく知事意見で風力発電設備の配置及び構造・機種・取付道路・送電線ルート等の工事計画を明らかにすること、インターネットで示す情報は誰でも見やすいような形式にすることなど、きびしく指摘されました。会社は、予定地の特徴にみあった環境影響評価のため、「方法書」を今年の一月提出しましたが、風車の位置は示したものの敷地や取付道路の位置もなく、具体的な工事計画や代替案なども示されませんでした。今年八月の知事意見では、土砂災害等への住民の不安に答える情報開示の姿勢と、評価項目の見直しが要求されています。



山口県阿武町福賀地区に立つ「大丈夫ですか、風力発電」の看板
市民の水道水源のひとつ仁保川源流への山口市不燃ごみ最終処分場計画変更、宇部市の水源地小野湖でのゴルフ場計画撤退、防衛省の陸上イージス・ミサイル配備中止と、住民側が三連勝した由緒ある看板です。

貴子は、今回の建設予定地に隣接する山口県自然記念物「八幡原のミヤマウメモドキ群落」の調査報告を二〇〇五年に書いたことがあり (<https://core.ac.uk/download/pdf/196711564.pdf>)、現地住民のみならずから影響を考えるフィールドワークへの声がかかりました。ほとんど一〇年ぶりに現場とその周辺を歩いてみましたが、山中にどのような工事道路をつけるのかなどがわからないと、微妙なバランスの上にならなっている日本でも最西南端の希少な植物群落への影響などは評価できるはずがありません。

ハチの干潟と発電所計画

九月になって、今度は瀬戸内海からのSOSが遊地に届きました。広島市の東の竹原市に残された希少生物の宝庫「ハチの干潟」に隣接する天然ガス発電所建設と洋上へのLNG備蓄タンクの設置計画です。JBG(ジャパン・バイオガス)という会社で、ベルリンに本社があり、日本ではもっぱら小規模な天然ガス発電を手掛けています。「ハチの干潟および賀茂川河口」は、環境省の「生物多様性の観点から重要な高い湿地」に指定されています。二二ヘクタールと面積としては小さいながら、これまでに研究の進んでいる貝類を中心に、新種や新分布の発見が相次いでいるかけがえのない場所です。最も絶滅のおそれが高いイリオモテヤマネコやコウノトリクラスの絶滅危惧I類として環境省レッドリスト二〇二〇・環境省海洋生物レッドリスト二〇一七に掲載された種が一四種、絶滅危惧II類が一六種、準絶滅危惧種が三六種、少なくとも棲息しています。JBGは、広島県の条例の、環境影響評価が必要とされる火力発電所の七万五〇〇〇kWをぎりぎり下回る計画とし、会社としては、カブトガニほか二、三の種類が存在しか把握していなかったことがわかりました。

これは大変なことですから、日本貝類学会多様性保全委員会・軟体動物多様性学会自然環境保全委員会(遊地が委員長)・日本生態学会中国四国地区会(二人は会員)・日本魚類学会・日本ペントス学会自然環境保全委員会が合同で要望書をまとめ、JBG・竹原市・広島県・環境省などに順次遠隔会議をお願いして、申し入れや情報交換をしています(要望書は、<http://ankel.jp/yui/?n=2528>に掲載中)。なるべく情報を出したくないという企業姿勢は、HSEと共通していて、地域住民への説明に配った図面などのほとんどに秘のマークが付いてあり、学会として備蓄タンクの構造や浚渫の有無などを尋ねても「まだ決まっていない」「本社に相談のうえ」など、具体的なことを教えてくれません。

二酸化炭素排出量をへらすという国際社会の目標にあわせて増えてきている再生可能エネルギーや天然ガス発電などは、とりかえしのつかない原発事故よりはましだとしても、やり方を間違えると人間の生存のもう一方の基盤である生物多様性そのものの崩壊につながりかねないことを心配しています。

(つづく)
(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

 a@ankel.jp
 <http://ankel.jp>



つばめ農園おひさま便り

23

安溪貴子・安溪遊地

収穫の秋・冬への準備

雪深い阿東高原の冬に備えて手作りのロケットストーブの手直しをしました。薪を焚くドラム缶本体からの熱気を八メートルほど水平に導き、そこを地元の土や石で覆って、オンドル式の座席や寝台を作ったものです。煙突に溜まるススやタールを定期的に取り除いてメンテナンスしやすい形への改良ですが、手探りで一〇日ほどかかりました。お湯をわかすだけでなく、原木しいたけや、自家用に取り入れた小豆二品種や「七月十日豆」という名前がついた白インゲンを乾かすのにも使っています。おかげで遠赤外線のおだやかな暖かさが家中に広がるのがうれしい毎日になりました。

お米の方は、去年は、ウンカ被害でわが家も半作でしたが、今年は被害もなく、ご近所でも平年のように収穫されたようです。他の農家より少し遅い一〇月一〇日ごろに、お米の収穫を終えて一〇月二一日からイセヒカリの新米の日本各地の予約のお客様への発送をはじめました。カMEMシに吸われた斑点米や、白や緑の未熟な米粒をコンピュータで区別してはじき飛ばす色彩選別機をご近所で使わせてもらえるおかげ

で、今年もりつばな一等米をいただけました。ずらりと並んだ米袋を見てホッとするやら、去年は量を減らすことをお願いせざるを得なかった予約のお客様の安心の声をきいて嬉しいと思います。くず米がたくさん出ますが、これは、小豆島の友人の鈴木農園の放牧豚さんたちにプレゼントしています（鈴木農園の様子は <https://sonofune.themedia.jp/posts/8174147/>）。

米価の暴落と食糧危機

うちは買ってくださいる方々に直接販売するものがほとんどで、農協には出していないませんが、今年は、昨年度の不作にもかかわらず全国的に農協のお米の買取価格が下がり、それがこの度の衆議院選挙の争点のひとつにもなっています。『長周新聞』二〇二一年一〇月四日によれば、山口県では、一般の農家が農協から受け取るお米の値段（仮渡し金）が玄米一俵（六〇キロ）あたり二〇〇〇円ほど下がって、一番高い「コシヒカリ」二等米のなかでタンパク含量七・〇％未満の最高値が一万一三四〇円で、前年から二二八〇円のマイナスとなっていてます。全国的にも、外食産業やコンビニ向けの業務用として出荷している栃木県では影



お米を色彩選別と検査のために軽トラに積み込みます。
10年間化学物質不使用の超絶美味しいイセヒカリ。
玄米2キ口、白米1.8キ口いずれも1300円+送料です。

響が大きく、今年の下落の幅が四一%の一俵七〇〇円という米もあります。一方、生産にかかる経費は、中山間地域の多い中国地方の場合、一俵当りの生産費は他の地域より高く、二万七〇九円かかっています(二〇一九年の農業経営統計調査)。

米の値段が下がるのは消費者にとつて朗報と思われるかもしれませんが、慣行農業の農家の多くは、完全に赤字となり、稲作が続けられない状況なのです。各地で災害も頻発していますし、高齢化が進むなか、数十ヘクタール以上の規模で営農をしてい

るところでも存続が危ういと思います。コロナ禍のなかで、米に限らず食料の輸入が止まったら、日本にただちに飢餓がくるのではないかと心配です。

米の値段が下がった説明は「コロナ禍で米の消費が減り二〇万トンほど米が余っている。政府は備蓄米を二〇万トン以上は買わないと決めたから買わない」というものです。その一方で、「ミニマムアクセス米」と称して外国から年に七万トンもの米を輸入していて、そのうちの三五万トンは、かならず米国から輸入するという密約があるのだそうです。米に限らず他の食品でもこういうことが起きています(鈴木宣弘、二〇二一『農業消滅——農政の失敗がまねく国家存亡の危機』平凡社)。

よく、「日本の農業は世界一保護されてきた。それが間違いなのだ」という人がいますが、事実は全く逆です。二〇一三年の時点で農業所得に公的助成が占める割合はスイス一〇〇%、フランス九五%、イギリス九一%となっている一方、日本は、農家所得に占める補助金の割合は平均一五・六%(二〇〇六年現在)だったところ、民主党政権の戸別所得保障制度の導入で二〇一六年には三〇%に増えましたが、安倍政権がこの制度を廃止して、現在は二〇%です

(鈴木前掲書、一七頁)。

米が余っているというのですが、いっほうで仕事が減って格差が進み、お米が買えなくて飢えている人々が国内にもいます。たとえば、ひとり親世帯や移民の人たちです。政府の支援が届かないなか、川越市のお寺で無償の食品提供をひとり親世帯を主な対象に始めたところ、就学支援を受けている家庭を中心にSNSのラインでの登録者が約一四〇世帯四五〇人に達しています(川越子ども応援パントリー「地域に広がる、ひとり親世帯への食品提供」『ビッグ・イシュー』三九六号、二二〜二三頁、二〇二〇年一二月号)。国内の飢える人々への人道支援をなぜできないのでしょうか。アメリカなどは、政府が農産物を農家から直接買い入れて、コロナ禍で生活が苦しくなった人々や子どもたちに配給するという人道支援を行っています(鈴木前掲書、一六頁)。日本も税金をこういった所に使って欲しいと思います。山口の田舎に暮らして、都会生活の本質でもある「三密」とは縁遠い風通しのいい暮らしをしているのですが、『ビッグ・イシュー』などを見ると、都会ではごく普通の家庭で飢えが始まっているのだと胸が痛くなります。(つづく)

(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

✉ a@ankei.jp

📄 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

24

安溪貴子・安溪遊地

生きづらさと統合失調症

先が見えず生きづらい毎日ですが、お元氣ですか？ 月食のお月さまはいかがでしたか。山口ではくつきりと見ることができました。晴れた夜のあとの朝は霧がかかりました。朝八時頃、霧が晴れると山並みが見えて、紅葉の色が日に日に鮮やかになってきたのがわかります。今年も中国山地の稜線に近い山のブナが紅葉して麦を播く季節です。山口では紅葉、そして落葉の時期が、二〇年前に比べて二週間ぐらい遅くなっています。つばめ農園の大豆もいつまでも緑の葉が残っていて、刈り取りの適期に悩みます。

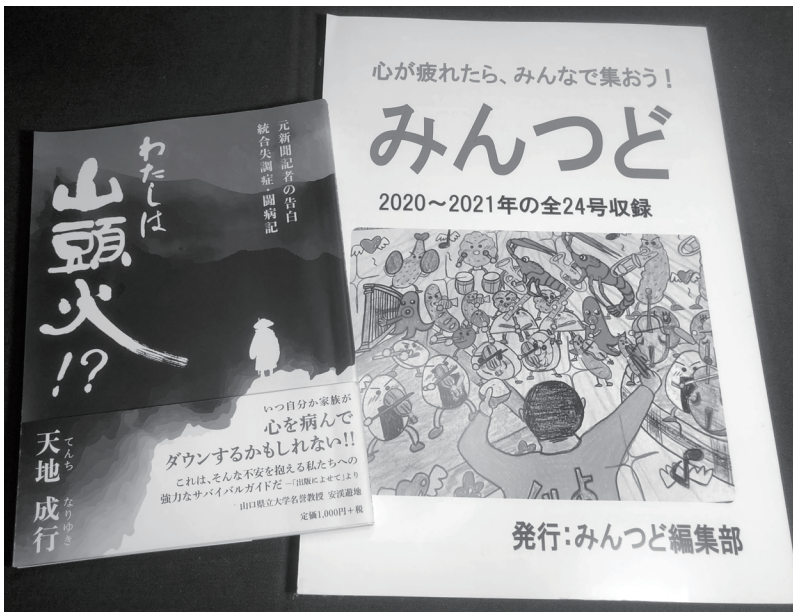
さて、二年ほど前になりますが、大学院で農村の地域おこしのようなテーマで学びたいという方からのメッセージが来ました。メールをやりとりするうちに、この方が、もと新聞記者で、統合失調症のために退職し、現在も治療中だとわかりました。そして、心がかぜをひいた人もそうでない人も「みんながつどえる広場」づくりをめざして「みんなつど」というミニコミを出しておられることを知りました。

心の病いを現在治療中の当事者が書かれ

たものに触れる機会はほとんどありません。先人観なしに読んでみたら、なんだか肩の力がぬけてほっこりする内容でした。新聞記者として鍛えた筆の力なのでしょう、文章もわかりやすく安心して読めるのです。統合失調症当事者のイラストレーターや歌手なども毎号登場し、いきなり入院した病院からのユーモラスなルポなど、毎号もりだくさんです。私たちのブログで広報のお手伝いすることを引き受けて、「みんなつど」ができるたびに貼らせていただくうちに、今では二四号になりました。

そして、昨春秋には、天地成行（てんち・なりゆき）のペンネームで、岩国市の出版とウェブデザイン会社「くるとん」から自分史を出版されたのです（<https://croun.jp/>）。『わたしは山頭火!?』と題するその本は、いまやだれもがそうなる可能性がある「心のかぜ」にそなえるための、強力なサブイバルガイドです。この本では、どうしても主観的になりやすい自分史的な闘病記を「寄り道」と称する長めのコラムで客観性をもたせる工夫がされています。六九人もの人に書いてもらったメッセージノートや、入院時の日記、カウンセラーからの意見などがその例です。そして、本の題にあるように、入院中に山口県生まれの

漂泊の俳人・山頭火の作風をめざして自由律俳句づくりに没頭した結果、八か月と予告された入院をわずか二か月に短縮できたのでした。「ちぎれ雲に空が広すぎる」「諦めて寝る お月さんがきれい」など数百年の印象的な作品が生まれました。



自由律句セラピーと「みんなつどラジオ」

新聞社での自分の持ち場の仕事だけでなく、もちまへのボランティア精神から様々な人間関係の調整役を買ってでる中で、自分の限界を超えてしまったという天地さん。彼は、人が自分の悪口を言っているように思える幻聴や幻覚、ひとりでも意見がまとまらない多重人格、他人ができることを自分ではできないという自責からの自殺願望などに苦しんできました。自由律句づくりに没頭した日々は、あれもこれもこれもではなく、短く言い切る言葉を選び、それをさらに磨いて、専門家の指導を受けるといふプロセスでした。まさに「自由律句セラピーの発見」と呼んでいいほどの効き目があったのです。

精神障がいのある当事者の情報交換と社会への発信をめざす天地さんの挑戦は、ミニコミや自分史を超えて『ズッコケ三人組』の那須正幹さんから助言してもらった小説、みんなつどブログ、YouTubeを利用したラジオ番組にまで広がり、当事者会での講話の依頼等も入るようになりました。私どもは、天地さんから助言を求められた時にも、

あくまでご本人の意向を大切にし、背中を押したり、足をひっぱったりすることがないように気をつけています。そして、できるだけお金をかけずにやりたいことがかなうよう、印刷やブログの開設をお手伝いさせてもらっています。そんな中で、コロナのために人的な交流が減っている息子の智慧も、天地さんの家でお買い上げの、つばめ農園のお米や大豆を届けたついでに、二時間あまりいろいろなお話をきいてもらったりして、物心両面で助けられています。

コロナ禍で、部屋への引きこもりを余儀なくされてしまっているみなさん、元気がなくなってきたら、それはウィルスではなく「心のかぜ」かもしれません。そんなときには、お近くでしたら阿東つばめ農園まで足を伸ばすか、ネット上の天地成行ワールドで遊んでみるのもいいかもしれません (https://mintudo.seesaa.net/)。紙媒体で読みたい方は、二四号分を一冊にした『みんなつど』集成版を郵送料のみの負担で無料送付していただけますので、以下のメールまでご住所をお知らせください。

(つづく)
(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

✉ a@ankei.jp

📄 http://ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

25

安溪貴子・安溪遊地

食事が変われば子どもが変わる

新しい年を迎えました。いかがおすごしでしょうか。つばめ農園では、白大豆の収穫と選別をなんとか年末に終えて、予約いただいた方々へのお米の発送を三分の一ほどはすませました。雪の中で、これから春までの農閑期にやっておくことをじっくり考える、そんなゆとりが、営農ソーラーのおかげで得られています。

昨年一二月に「やまぐち食育フォーラム」という、元気な集まりに家族三人で出ました。主催は連載一五回目に紹介した「ヤッタネ! やまぐち」、講師は、国光美佳さん(子どもの心と健康を守る会代表)、前島由美さん(ゆめの森こども園代表)、吉田俊道さん(株)菌ちゃんファーム代表取締役)です。

国光さんは、この連載の三回めでご紹介した、食品と暮らしの安全基金の小若順一さんとともに『食べなきや、危険! 食卓はミネラル不足』(フォレスト出版)を出版。小若さんたちが、チェルノブイリの被害者支援とならんで、このところ力を入れていることで、市販の食品のミネラルを測った結果は、鉄やマグネシウム、といった主要

ミネラルでさえ厚生労働省の一日摂取基準にはるかに届かないものが多く、これを食べ続ければ死ぬというレベルのものだったのです。ミネラルが不足するのは、事前に水煮される食材が多いこと、食品添加物として「リン酸塩」が多用されること、そして、精製食品とくに精製油脂を使うためです。ミネラルの圧倒的な不足を補うために、インスタントラーメンやジュースにも魚や昆布から取った出汁の製品を加えるだけという、いわば対症療法のような取り組みをしたところ、わずか数日で子どもに変化が現れはじめたというお話です。

講演で紹介された「こうちゃん」という男の子は、六歳のときにアスペルガー症候群と診断され、相手の状況や気持ちを読み取るのが苦手でした。同年代の子どもたちとの関係がうまく築けず、パニックを起こすなど集団生活に適応できない状態で、向精神薬を処方されていました。ミネラル補給を始める前後での「こうちゃん」の絵とそこに添えられた本人の言葉が、つらいものから「しあわせー!」になる大きな変化に圧倒されます。このできごとが、国光さんが『食べなきや、危険!』を書き、「子どもの心と健康を守る会」を立ち上げるきっかけになりました。



自然の中で子どもに寄り添う

続いて、スピリチュアルな面を重視しておられる霧囲気の前島さん。出雲大社の向かいにある「ゆめの森こども園」での実例集として『輝きを取り戻す「発達障がい」と呼ばれる子どもたち』（どう出版）の著書があります。それによると、二五年前保育士として勤めたあと、二〇一一年から発達障がい児の療育支援を始めました。二〇一四年に「ゆめの森こども園」を設立、二〇一六年には、古民家風の園舎を建てました。そこでは、すべてが自然素材で、土間、かまど、囲炉裏、掘りごたつ、茶室、檜風呂等があります。

昔ながらの日本家屋での療育支援の場で鶏の平飼い、養蜂、ウサギ、犬、猫などの飼育と、自然栽培での畑作り。その中で、薪割りやかまど

でご飯を炊くことを子どもたち自身が体験するのです。「イライラ」や「感覚過敏」「多動」などに苦しんでいた子どもたちが落ち着きを取り戻し、自信をもって学校や社会で活躍できている、という内容でした。こうした子どもたちの立ち直りは、地球環境と人間活動のバランスの回復なしには、実現できません。そうした思いから、この連載の第一六回で紹介した、日本の種子を守る会の山田正彦さんらの応援も受けて、二〇一九年に化学物質を使わない食と農をめざす「フーズフォーチルドレン」という団体を立ち上げたところ、わずか一年で四七都道府県すべてに支部ができました。

ADHD（多動性症候群）の治療に使用される向精神薬の売り上げが、ストラテラという薬を例にとると、二〇〇九年の五・四億円から二〇一六年には二一九億円と右肩あがりに増えています。副作用も幅広く、最近子どもたちによく処方されているエビリファイという薬を例にとると、主な副作用には「CK上昇（筋肉の細胞が壊れる）、振戦、傾眠、ALIT（肝機能のGPT）上昇、不眠、神経過敏、不安、アカシジア（体がむずむずしてじっと座ってられない）、流涎、体重増加、筋強剛」が挙げられ、その他の副作用の中には、自殺企図などを含

むたくさんの精神・身体の異常があげられています（『日経メディカル』の記事）。そして、子どもにも処方されているこれらの向精神薬でなんらかの副作用が出現する確率は、六五〜八〇%にも達すると、前島さんは指摘しました。

前島さんの著書の中で、強く印象に残ったのは、リストカットを繰り返す高校生のカナちゃんが、明るく「前島さん、カミソリが切れにくくなったので、新しいのを買いに連れて行ってくれませんか？」とたのんだエピソードです。お店のカミソリコーナーの前でカナちゃんは、いろいろ使ってきたので、「あれはよくない、これも」と選ぶうちに、目を輝かせて、ガードのないスパッと切れるタイプの一〇本入りを買うおうとします。「それは錆びやすいでしょう。傷口から錆が入ると、熱がでて命取りだから」といって、三本入りにさせ、さらに、自分用に一本わけてほしいと頼んで、二本に減らしました。その過程の前島さんのドキドキと、やがてリストカットが止まるという結果に、とことん子どもに寄り添うケアのあり方を学ばせていただきました。むちゃくちゃ面白い菌ちゃん先生のお話は次回に。

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

（つづく）

✉ a@ankei.jp

http://ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

26

安溪貴子・安溪遊地

昔の暮らしを楽しむ子どもたち

山口市北部の阿東では、厳しい寒さの日があっても、大雪で営農ソーラーが倒れた去年に比べれば、一晩で溶ける程度の雪しか今のところ降っていません。

陽射しのあたたかなお正月に、県庁そばの街中からとても元気な男の子二人と、小さな女の子が両親に伴われて、阿東つばめ農園のおひさま交流館に遊びにやってきました。はじめのうちこそ、持ってきたシヤボン玉遊びなどしていましたが、すぐにあたりのあぜ道を走り回ったり、水が張った溝をびよんと越えたり、氷が張っているのをみつけたらさっそく持ち出して割ってみたり……。きけば男の子の一人は、ご近所の子だということです。

田舎暮らしにあこがれて、自分で種子をとる小さな農業なども始めているというご家族を歓迎して、薪ストーブを焚いて、いろいろな話をしながら、石臼をセットし、収穫してある蕎麦の実を挽いてもらおうと思いつきました。

上下合わせて50キロ近い大きな石臼で、私たちも蕎麦を挽くのは初めてです。男の子二人で力を合わせて回すと、殻が外れて

ちゃんと粉になるようです。目の細かい篩でふるって、そば殻を分け、まだ挽けていない荒いものは、また臼に戻します。そのうちに、女の子まで参入して、子どもたちだけでやれると言いました。用意した蕎麦の実をみんな挽いてしまつて、「もつとないのー？」と催促されるぐらい、子どもたちは石臼にはまっています。お父さんは、なかなかやらせてもらえず、お母さんは危なくないようにちゃんと見ているけれど、子どもたちのやりたいように自由にのびのびとやらせている姿が印象に残りました。

できあがった蕎麦粉をちゃわんに入れて、薪ストーブの上のやかんからお湯を注いで、そばがきを作つて試食した子どももた



石臼を回して蕎麦粉づくりに熱中する子どもたち

ちは、その素朴な味が気に入ったようです。自宅も薪ストーブだという、ご近所の男の子は、そば殻で枕をつくりたい、といった持ち帰りました。

いつもは静まり返っている田舎道を元気な子どもたちが走り回るだけでもうれしいのに、その子らが、自然のものを見つけて楽しく遊び、昔の暮らしで役立ってきた道具を使いこなす。なんとすばらしいことでしょう。空き家はたくさんあるし、空いている農地もあるのだから、移住大歓迎ですよー、とって一回目の交流会は盛り上がりました。

畑仕事や田んぼの準備が始まったら、こんどはどろんこ遊びもできるから、またいらっしやいね！

菌ちゃん先生の畑づくり

前号でお知らせした二〇二一年二月四日に山口市で開かれた、田んぼや畑でのびのび育つ子どもたちを目標のひとつにした「やまぐち食育フォーラム」。そこでお会いした、菌ちゃん先生こと吉田俊道さん（株）菌ちゃんファーム代表取締役）は、あたりの空間を生き生きとしたエネルギーでみたくすようなパワフルなお方でした。

いきなり「みなさん！ 今の、国光美佳さん（子どもの心と健康を守る会代表）や、前島由美さん（ゆめの森こども園代表）の発表聞いてどう思われましたか？ わずかな数の子どもがたまたま食事を変えたら調子がよくなった、という報告でしたけれど、そんなことで一般的に通用するわけないでしょう？ そう思われた方は手を上げてください。」勢いに押されて数人が手を挙げました。

「そう。それが専門家の見方なんです。そして、農薬なしに農業ができるはずがない、というのが専門家の見方なんです。でもそれは間違っていたんです。」

大学院で植物生理を学んで就職した長崎県の農業改良普及員を三六歳のときにやめて、農業を始めた菌ちゃん先生は、有機農業に挑戦。草は取っても取っても生えてくるし、虫がやってきてキャベツはすだれのように食われました。モグラが穴をあけるので、アスパラガスの根がやられて全滅といった経験をしました。食べてみると虫が集まる野菜がえぐく、虫がこない野菜が甘かったことから、気づきがやってきました。草も虫もモグラも敵にしない、地上においた枯れ草に糸状菌（カビ）を繁殖させるという農法にたどり着いて、今では、虫がこ

ないどころか、モグラは二六センチも下を潜るようになって、モグラのおかげで畑に空気が入ってますます根が伸び広がるようになります。虫は腐敗した有機物を食べるから、モグラは腐敗したところにいるミズなどの虫がほしくて潜っていたのだからといえます。具体的には、ススキやセイタカアワダチソウなどの固い草や、籾殻などを土の上のせて、二、三カ月マルチをかけて雨にあてないようにしてやるだけです。農業の常識としては、炭素分が多くて圧倒的に窒素分が少ない状態ですから、窒素飢餓という状態で、作物はほとんど育たないはずなんです。ところが、菌ちゃんふぁーむでは、それでも育っています。それは、糸状菌につづいて、窒素固定菌が働いて野菜の根に肥料分を渡してくれるおかげで、野菜がよく育つというのです。

女優の柴咲コウさんが、北海道で菌ちゃん先生の指導をうけながら農業にとりくんでいるビデオなどをみながら、うちも、これまで利用してこなかった、荒れ地のススキを刈りはじめました。畑にもっていかないうちに、雪にふられたりしています。草をたっぷり畑の上においてやることの効果を見ていききたいと思っています。（つづく）（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

✉ a@ankei.jp

📄 http://ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

27

安溪貴子・安溪遊地

地域の魅力の発信

山口県立大学に在学中から、「山口県のためにご恩返しをしたい」という意欲をもってさまざまな地域での活動をしかけてきた、伊藤光平さんという若者がいます。卒業後、地域情報誌の作成にかかわるかたわら「#おいでませ山口桜NAVI」という団体の会長として活躍中です。この団体は、文部科学省の「#地(知)の拠点整備事業(COC)」の支援を受けて、山口県立大学の地域共生センターが開講していた「#桜の森アカデミー」の中の「#やまぐち学マイスターコース」の受講生の有志が立ち上げた観光ボランティア団体です。

創設五周年を迎えて記念講演会を企画するので、私も二人に話をしてほしいという希望が届きました。お題は、「渋沢敬三と宮本常一」です。二〇二二年二月一九日に山口市小郡で開催されたその会でお話したことをご紹介します。

副題は「旅で感じる地域の魅力と底力」としました。やまぐちの足もとにある魅力の発信と発信ができていますか？ という問いかけです。

コロナ前の二〇一九年に、山口県を訪れた観光客のほぼ半分が韓国からのお客様でした。関釜フェリーで下関についたプサン



豪雨災害から復旧した山口線のSLやまぐち号を歓迎する「おいでませ山口桜NAVI」のメンバー

からの旅行者に、山口県立大学生が八〇〇通あまりのアンケートを取った二〇〇八年のデータによると、目的地の五〇%が九州各地、二四%が山口県で、その四分の三は、下関市内が目的地で、山口県内各地に足を伸ばす人がとても少ないことがわかったのです。やまぐちの魅力の発信は、どこかが足りないのでしょうか？

山口県観光連盟が作っている『#長州タイムズ』という無料新聞があります。その最新の第九号「ふく(河豚)号」を見てみると、一面は伊藤博文の写真、伊藤と現県知事が架空対談で、日清戦争の講和条約を結んだ下関の春帆楼で、三〇〇年の禁をや

ぶって河豚を食べることにした伊藤の英断を褒め称えるという内容でした。外国から山口県を訪れる観光客の半数を占める韓国人の人にとって、朝鮮の利権をめぐる戦争とその後の植民地化の歴史の中で、もっとも見たくないという伊藤博文の顔と名前が、でかかで現れるというのはいかがなものでしょうか。

会では、受講者からの事前リクエストに応じて、伊藤博文が暗殺されたハルビン駅や、そこに建てられた安重根の記念館、さらに彼が死刑になった旅順監獄の博物館、七三一部隊跡の陳列館などを、私たちが二〇一五年に訪ねた時のようすを、もうひとつのツアーの例として紹介しました。

「韓国の大学教授たちといっしょに山口県をまわるといっツアーを企画したいね」これは、春帆楼や、伊藤らがひいきにした山口市の料亭#菜香亭などを訪問したあと、ソウル大学の人類学名誉教授の全京秀先生がおっしゃったことばです。一八三名の犠牲者の七割が朝鮮人だった、宇部市床波にある#長生炭坑の水非常（一九四三年二月三日の水没事故）の跡地などもうこうした旅の目的地のひとつでしょう。

自然に目をやれば、海のすばらしさ、なかでも「奇跡の海」とも呼ばれる周防灘の生物多様性は目が離せません。とくに上関原発予定地の周辺は世界的に注目される生

物の宝庫です。「#上関の自然を守る会」では、古民家を改築して「#体験型ゲストハウス・マルゴト」をオープンしています。

危機の中での底力

コロナで観光客が激減した中で、それでも地域が生き残れる底力はみつかりましたか？ というのが二番目の問いかけです。

観光とは、生命の光をみることに、いのちといのちが同じ時と場所を共有して交流できる奇跡を喜びあうことです。その反対語と言えるのは戦争かもしれません。

敗戦の前後、日本は、現在のコロナの危機よりもはるかにきびしい困難の中にありました。

宮本常一という人物を見出して、三〇年間も食客として庇護し、村々を歩いてまわらせた渋沢敬三。新京（長春）に新しくできた建国大学の教員になりたいという宮本に、渋沢は海外ではなく国内のフィールドワークを勧めました。その真意は、敗戦によって渋沢のような財閥や地主が没落したあと、まだ底力を失っていない農村から日本を再建するためのネットワーカーを育てるところにありました。

研究資料を東京から家族の住む堺市に疎開させていた宮本先生は、昭和二〇年七月の空襲でそのすべてを失います。普通の学

者なら自殺したくなるようなショックでしょう。ところが、その直後から、彼は大阪府の嘱託として、配給にまわす野菜の調達という仕事を引き受けて、府内の農家を自転車で回るのでした。藤井寺では、稲の病気を奇跡的に回復させる助言を成功させています。そのあとは、離島振興法の設置とポランティア事務局局長として獅子奮迅の働きを続けました。

コロナ禍のいまこそ、山口県の小規模な田舎まちが分散するという人口配置と、大都市がないだけに身近にある豊かな自然を大切にして、自給できるところを自給しましょう。そして、とりあえずの突破口として、学校給食を少しずつでも有機にしてい、農業が持続的にできるしかけを作りましょう。それが、結局は観光の魅力を高めることにもつながる底力を試される取り組みになるのではないのでしょうか。話しきれなかった当日のプレゼンをこの文末のブログでごらんください。（つづく）

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）



QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。

 a@ankei.jp

 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

28

安溪貴子・安溪遊地

戦争と真実

雪が少なく晴れた日が多いねと、田んぼの準備を始めているなか、ウクライナで戦争が始まってしまいました。「戦争の最初の犠牲者は真実だ」と言われるように、ニュースでもSNSでもプロパガンダの影響を受けていないものがなかなか見つかりません。戦争こそは最大の環境破壊であり、地球温暖化防止、SDGs等々というかけ声を吹きとばしてしまいます。チェルノブイリ原発をはじめ、稼働中の原発もロシア軍によって攻撃され、外部電源喪失も伝えられることは、福島原発震災を経験中の日本として重くうけとめざるを得ません。阿東つばめ農園では、市民科学者・高木仁三郎さんが創設した#原子力資料情報室(<https://nic.jp/>)を確かな情報源としていきます。

インターネットもスマホもなかった昭和一九年の冬、わたしたちの鳥取・大山山麓での初めての稲作の師匠だった#津野幸人先生(当時鳥取大農学部長)は、中学二年生の愛国少年でした。彼は、政府の発表を信じて特攻隊を志願。その時、四国松山の片田舎の一介の老農夫であった彼のおじいちゃんがこう言いました。「日本は負ける。お前らみたいな子供までが死ぬことはな

い。明日これで小指を切れ。小指がのうても百姓はできる」と牛の飼い葉を切る押し切りを指さしました。当時、国際的な情報を一切もたないおじいちゃんが、大本営発表などの圧倒的な世論工作とマインドコントロールに抗して、日本は負けるということが的確に判断できた根拠は、アメリカ移民の知人にもらった古い剪定鋏でした。二〇年も使っているのに、切れ味は新品同様、バネはびくともしていません。「百姓道具にこれだけのええ鋼鉄を使う国なら、兵器も日本のものとは較べもんにならんぞな」というのです。そして、中学校の宿題で集計をやらされている、敵の軍艦と戦闘機の



大きな鮫田さんと記念写真

被害数が本当ならば、日本まで敵の爆撃機が飛んでくるはずがあるまい、と付け加えたというのです（津野幸人、一九九一『小農本論―誰が地球を守ったか』農文協）。

津野先生のこの本には、日本列島で一億二五〇〇万人の食料が自給できるという計算も示されています。いま日本の食料自給率は三七%といわれますが、その生産を支える化学肥料の多くは中国からの輸入です。そして、カリ肥料の四分の一は、ロシアとベラルーシからです。いのちの支えを輸入に頼ってきた日本は、コロナと戦争と経済制裁で激化する食料・飼料・肥料の獲得競争で「買い負け」始めています。以下は、二〇一一年一月の津野先生の言葉です（<http://ankei.jp/yuji/?n=1242>）。

戦争のただに核武装があるのではない。核兵器は、経済行為における国際ルール違反を強行する後ろ盾となっているのである。……武器で食糧を生産することは絶対にできない。自国の国土を大切に、そこから食べ物を生産するのがまっとうな道である。わが国土は、地下資源こそ乏しいが起伏に富んだ地形は、多様な風土と食糧生産に必要な面積、そして十分な降水を恵んでくださっているのである。国土のあらゆる起伏を利用して、皆で小さい農業をやろう。

有機給食がひろく未来

本当の平和を求めて、日本でいま私どもに何ができるのか。阿東つばめ農園では、食料とエネルギーの地域自給を主な目標にしています。有機農業は化学肥料の輸入に頼らないぶん、より安定した食料の国内自給につながる可能性があります。その未来へ向けた確かな道筋と考えられるのが、有機給食の導入です。

二〇二二年二月二六日に、山口環境保全型農業推進研究会（山口かんぼ研）等の主催で第三二回「山口県環境保全型農業フォーラム」を開催しました。有機給食の導入で最先端を走る「いすみ市の具体的な様子を、山口市の会場といすみ市職員の「鮫田晋（さめだ・しん）」さんを遠隔で結んで、詳しくうかがい、質疑もかわしました。鮫田さんは、東京での会社勤めのころから房総半島の南の方へ趣味のサーフィンをするために通ううちに移住して、いすみ市の公務員になりました。「学校給食を地元の有機食材で」という、市長発案の取り組みのたった一人の担当になりましたが、いずれも一年でやめた三人の前任者のあとを継ぐ四人目でした。しかも、いすみ市というところは、有機農家が多いたくいなかったのでゼロからの出発となりました。

すべてが手探り状態におかれた鮫田さんは、農家を見つけて説得し、除草剤をまかないでも草に負けない稲作の方法を、民間稲作研究所の稲葉光圀さんに師事して、それを伝えました。三度代掻きをして深水にすればヒエを抑えられるというのですが、忙しい農家の代わりに、毎朝水深を確認して回る「水まわり」を四〇日間やり抜いたりしました。とり組んで五年目の二〇一七年、ついに、いすみ市の学校給食に必要な四二トンの有機米を全量地元で生産できるところにこぎつけました。野菜にも広げて移住者も増えている現状は、当日の動画（<http://ankei.jp/yuji/?n=2560>）をご覧ください。材料はそろうの？ 誰が払うの？ などの疑問が解け、農協の巻き込み方などもわかります。

この連載の一五、一六、二五でお話してきた子どもたちの食の安全と、私たちの未来のために、平和への祈りをこめて種子をまき、育てていこうと思いを新たにしています。（つづく）

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）



QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。

a@ankei.jp

<http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

29

安溪貴子・安溪遊地

アフリカからの発言

世界保健機関（WHO）のテドロス・アダノム・ゲブレレイエス事務局長は二〇二二年四月二三日、記者会見で、ロシアが侵攻したウクライナに対する支援について、「世界全体に影響を及ぼす」ことから「とても大事」だとしました。

一方で、人道危機に陥っている、出身地であるエチオピア・ティグレ州やイエメン、アフガニスタン、シリアは、ウクライナと同等の注目を受けていないと指摘。ウクライナに対する支援のごく一部に相当する支援しか、これらの人道危機には寄せられていないと述べました。そして、「黒人の命と白人の命について、世界は本当に同じだけの関心をもっているのか疑わしい」と発言。「率直に言って、世界は人類を等しく扱っていない。人類は平等だが、特別扱いを受けている人というのは存在する。これを指摘するのは心が痛む。目に見えることだからだ。非常に受け入れ難いが、現実だ」と続けました（#BBCニュースから）。

二年前の四月、テドロス氏は、「ブラック」「ネグロ」などと言われ、殺すぞと脅されていても、自分は黒人であることに誇りをもっているから一切気にしないが、アフリカ人をひとまとめにして侮辱するようなこ



隣同士でともに食事するコンゴ川上流の村の人たち（1990年安溪遊地撮影）

とは許さない、と記者会見で述べました。実際に、ウクライナからの避難民が殺到した国境やバスの乗り場で、アフリカ出身の人たちは、肌の色の違いで後回しにされ、警棒で打たれたり、乗車を拒否されるといふ目にあつたことが報道されています。

国際ニュースの多くが、ウクライナの戦争のことで占められる中で、ほとんど気づかれていませんが、エチオピアは、毎月の輸入に必要な外貨準備高が一・三ヶ月分しかなくなつたそうです（JICAのニュース）。食料の高騰が人びとの命を直撃する状況でも、支援物資が届かないし、そもそも買えないのです。

広島原爆で使われたウランの産出地であり、現在もスズ・タングステン・タンタル・金といった地下資源が豊富という「資源の呪い」のために内戦状態がおさまらないコンゴ民主共和国東部は、一九七〇年代の終わりから私達がなんども滞在させていた場所です。

すでに六〇〇万人以上が犠牲になっているコンゴ紛争の中でも、最悪の性暴力被害を受けている女性たちの心身の治療にあたるデニ・ムクウェゲ医師は、二〇一八年にノーベル賞を受賞。現在劇場公開中の映画「#ムクウェゲ」で日本人に語りかけていることのひとつは「あなたのスマホにもコンゴの紛争鉱物が使われているという現実を知ってください」という問いかけです。

和解と共存への中村哲医師のメッセージ

ウクライナの戦争、たいへん心が痛みます。しかしながら、情報が溢れていて実態がわかりません。つい思うことは、ほとんど報道されない中で、今も続いているアフリカやアフガニスタンの戦争・紛争・飢餓・経済制裁のことです。

二〇〇一年九月一日、私たちは、息子の大意とともに、西アフリカ・ガボンの首都リーブルビルにいました。ガボンの森の

村で過ごしたあと日本への帰りのパリの宿で、テロとの戦いと称してアメリカのアフガニスタンへの攻撃が始まる中、初めて中村哲医師らのアフガニスタンでの活動を知り、救われる気持ちになりました。この活動を支える#ペンシャワール会（PMS）の会員にもなり、以来、たくさんの元気づけられる情報をいただき支えられてきました。

「金さえあれば何でもできて幸せになるという迷信、武力さえあれば身が守られるという盲信に惑わされたいではない」——— なんとという力強い言葉でしょう。アフガニスタンでは、気候変動による大旱魃が年々進行中です。中村医師らは医療支援から運河の建設に軸足を移して一五年、二〇一七年には、六〇数万人の農民が生活できる一万五六〇〇haの砂漠の緑化にこぎつきました。その間、日本からの募金は延べ三〇万人に達しました。志を引き継いで活動を続けるアフガニスタンの地元のみならず、ペンシャワール会に、敬意と感謝の気持ちをもっています。以下に、中村哲医師の残された和解と共存へのメッセージを抜粋します。

温暖化対策が話題になって久しいが、以前の気候に戻るには長い年月がかかる。それまで待つわけにはいかない。自然と人間がいかに向き合い、「今ここで、

いかに良く生き延びるかが最大の関心事とである。

願いはただ二つ、三度三度のご飯が食べられること、家族一緒に故郷で暮らせること、それだけだ。

水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなるうと、他所に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。

小さな我々にできることは、自ら一粒の種となって地上に落ち、時を待つこと。内外で暗い争いが頻発する今でこそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います。

決して他人事ではない。アフガンで起きたことは、形を変え、日本でも起きる。狂気のような世界情勢の中でこそ正気を対置し、人と人、人と自然の、和解と共存を説く。たとい遠い道程であろうと、人間が失ってはならぬ理だと信ずるからである。

（つづく）
（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）



QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。

✉ a@ankei.jp

📄 http://ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

30

安溪貴子・安溪遊地

野のめぐみと日向ぼっこ

山々の緑が華やいで、今年は人影が昨年よりも多い阿東高原です。SLが走る山口線の列車を撮る人々も多く、愛知や埼玉ナンバーの車も駐まっています。そして田んぼにも農業を志す若者や、久し振りに帰省してきた家族の姿が見えます。溜池からの水を得て、中国山地の山裾が「水の国」になってきました。つばめ農園も稲に大豆に夏野菜にと忙しくなりはじめています。

この季節は畑の端境期ですが、食卓にのぼる野の恵みが余りあるほどです。フキノトウに春の訪れを見て、やがて天麩羅でタラノメ、コシアブラ、ヨモギ、スイバ、柿の葉やユキノシタ、そして山裾にはウド、ミツバ、タケノコ、セリ、フキ、クレソンと続きます。今年はお師匠さんの庭から山菜のコゴミ（クサソテツ）とウルイ（オオバギボウシ）の苗をいただいて植えました。来年を待ちながら美味しい食べ方を学んでいるところです。

今年、サツマイモの苗がどの店でも売り切れで、ホームセンターでようやくやしおれた宮崎県の苗が売られていました。そこでのお知らせでは、化学肥料が六月か



「日本の種子を守る会」の山田正彦さんに励まされる安溪大慧

ら四〇%の値上げとか。いよいよウクライナでの戦争と円安などの影響が、日本の食料生産そのものを直撃する構えです。

農薬や化学肥料にたよらない野菜づくりとその流通について、いろいろ教わっている中村進卓さん（中村自然農園・山口市）のところで修行中の大学院生の若者から、素敵な話を聞きました。

いろいろな野菜の栽培について、中村さんから課題をもらうんですが、どうにも難しいものが多くて、ネットで調べても答えがみつからないことがほとんどです。ところが、インターネットもほぼしないし、メールさえあまり読んでいない中村さんが、実にいろいろ

ろなことを知っておられる。それで、「どうしてそんなことをご存じなんですか？」と尋ねたんです。答えは、「そこらの農家さんと日向ぼっこをすることだ。本にもネットにも載っていない、いろいろなことを教えられる」というものでした。

私どもは、これはまさに、宮本常一先生流の地域に根ざした知恵の聞き取りの極意ではないかと思ひました。全国一律でない、地域ごとに伝えられ蓄積されてきた経験、それが日向ぼっこをしながら問はず語りに学べたらすばらしいですね。

平和と食料の自給

宮本常一先生が、昭和二十一年一月、周防大島の自宅から大阪や兵庫での農業指導のあとで、生涯の師であった渋沢敬三氏のもとを訪ねた時のことが思い起こされます。

……私は東京へ出て渋沢邸へいった。ちょうど役所（先生は当時大蔵大臣であった）からかえってきた先生は「幣原さん（当時首相）は大変なことを考えておられる。これから戦争を一切しないために軍備を放棄することを提唱しようとしておられる」と昂奮気味

に話された。

「軍備を持たないで国家は成り立つものでしょうか」とおたずねすると「成り立つか成り立たないかではなく、全く新しい試みであり行き方であり、軍備を持たないでどのように国家を成立させていくかをみんなで考え、工夫し、努力することで新しい道がひらけてくるのではないだろうか。一見兎戯に等しい考え方のようだが、それを国民一人一人が課題として取組んでみることだ。その中から新しい世界が生まれて来るのではなからうか」といわれた。これは実にむずかしいことである。しかし日本人としてやらなければならぬことではないかと思つた。この先生のことばは今も私の心の中になまなましく生きている。学問をするということも、人が人を信頼する関係のうちたてていくためであり、どのようなすれば安んじて生活していくことができるかを見つけていくことができると思う。そしてそういうことについて、私にできることは何であろうかと考えた。今も考えつづけている。ただ戦争反対、軍備反対と叫んだだけで戦争はなくなるものではない。一人一人がそ

れその立場で平和のためのなさねばならぬことをなし、お互がどこへいてもはつきりと自分の是とすることを主張し、話しあえるような自主性を持つことであり、周囲の国々の駆け引きに下手にまきこまれないようにすることである。そしてそれを農民の立場から主張してゆくには、食料の自給をはかることではないかと考えた。食料を自給し得ている国は外国の干渉を排除することができる。それは今日までの歴史を見ればおのずから肯定できる。農民としてなさねばならぬことは、より高い生産をあげ、まず国民の食料を確保するように努力すること。次には国民の一人一人が安定した生活ができるような道を見つけていくことだと考えた（宮本常一、一九七八年『民俗学の旅』文藝春秋、一四八〜九五頁）。

主権の回復と世界平和へのはるかな道を、何を育て、何をどのように食べるのかを、一人一人が自分に問いかげながら、この連載の四回目（二〇二〇年一月号）に紹介した「食の主権」を取り戻すことから一歩づつ歩いていくしかありません。

（つづく）（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

✉ a@ankei.jp

📄 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

31

安溪貴子・安溪遊地

農機具の点検と修理

山阿東つばめ農園では、イセヒカリの苗が順調に育ち、田植えが終わって除草機が活躍する時季に入っています。全部で一ヘクターほどで、農機具の補助金などがもらえる規模ではありませんから、大きな農機具は基本的の中古で入手して、直しながら使っています。田んぼの師匠の吉松敬祐さんの口癖は「直せない農機具はない」なのですが、最近のコンピュータ搭載の機構などはそうもいきませんし、農作業の最中に壊れたら、自分でゆっくり直している暇はありません。

現在使っている三三馬力のトラクターは、一昨年耕耘部分を回すチェーンのケースが破れて、その部分全体の歯車ごとの取り替えを業者に頼みました。昨秋は、コンバインで稲刈り中に、ゴムのクローラー（履帯）が切れたので、新しいものを発注しました。翌日には来てくれて、田んぼの中で一本九五キロもある新品と交換。この手の修理は一回三〇万円とします。泥のついた農機具を洗う高圧洗浄機が壊れたのは、新品に買い替え、有機肥料をまくための動力散布機は、ジャンク品を買ったものですが、割

れた肥料タンクは、部品代が原価の三倍近くしました。去年から農機具を雨ざらしでなく、ポリハウスの中にも収納できるようにして、保管条件は改善されたのですが、それでもプラスチックは紫外線ですぐに劣化するのですね。田植え機の常用除草機「あめんぼ号」の草取り車の歯も折れはじめましたが、この部品は限定生産品でお値段高めです。主に輸入にたよっている工業製品は、このたびの円安でますます高くなるでしょう。それでも、これらの費用は、営農ソーラーからの毎月の収入でカバーできる程度です。課題は、大型の機械の買い替えにどう備えていくかです。おひさま発電所で捨てている昼のピーク電力を活用して、つばめ農園の農業機械や自動車が動くようになるのは何年ぐらい先でしょうか。

和蜂とイセヒカリ御田植祭

五月末のある日、和蜂（ニホンミツバチ）の巣箱がつばめ農園にやってきました。阿東つばめ農園の応援団をしてくださっている、瀬戸内海側の防府市富海で、自然生活のかたわら、藍の里づくりなどのさまざまな地域おこしを仕掛けておられる白井大和（ひらい）さんのご厚意です。以前、すぐ近くの吉松



つばめ農園にやってきた和蜂たちと
なごむ



農園で二〇群も飼っていた和蜂の群れが巣にもどらずにすべて失われたということを知っていますので、広大な水田でのネオニコチノイド系の農薬散布がさかんな阿東では、飼育が難しいのではないかと一度はご辞退もうしあげたのですが、それでも届けてくださったのです。今年は大豆を植えることにしている営農ソーラーの田んぼの上手の、SL走る阿東高原を一望にする見晴らしのいいところに二つの巣箱を並べました。初日は帰る場所を間違えて隣の巣箱に入ろうとして、匂いが違うらしく取っ組み合いになったりしていましたが、翌日には落ち着きました。攻撃性がなくて穏やかな和蜂たちが働くようすを、巣箱の前のク

ローバーの上に寝転がって眺めていると、あらたな仲間が増えたうれしさがこみあげてきます。

前号に写真を出した、日本の種子を守る会の山田正彦さんから電話がありました。
#稲の多年

草栽培の挑戦に使いたいのから、古代米的な能力を秘めているそうないせヒカリの種子が余っていないかという問い合わせでした。ちょうど無農薬栽培の種籾で尖った芒を取って、六〇度七分間の温湯殺菌をし、人肌ぐらいの催芽機に二日ほど入れ、芽と根が膨らんで鳩胸状になったものを乾燥した播種直前のものが、五キロばかり余っていましたので、それをお返しすることにしました。今回は発芽玄

米として食べる予定でしたから、通常の種籾の半額でご提供しました。

同じ頃、山口県神社庁の若手神職のみさんの主催で、第三回いせヒカリ御田植祭のご案内がありました。一〇年来のいせヒカリ農家として、つばめ農園

の家族三人で出席しました。場所は、山口市小鯖の山村で、吉松さんからいせヒカリの種籾づくりを引き継ぐことになった米本さんの田んぼです。以前、猪の肉や骨や頭、狸や狐の肉をいただいたことがある猟師のおじいさんの息子さんの代になっており、遊地はお孫さん二人を大学・大学院で教えたこともありしたので「ああ、あの狐肉を食べた先生」とすぐに思い出していただけました（#狐肉への挑戦記録は、<http://ankei.jp/yuji/?n=188>）。齋服をまとった三人の神職が、笙を吹いて神を迎え、厳かに祀りを進行します。若手神職たちの手植えに先立つ来賓挨拶で「伊勢神宮の職員で山口でいせヒカリの原種が作られていることを知らないものは一人もありません」という言葉が紹介されたのが印象に残りました。#山口いせヒカリ会の会長である宮司様に、つばめ農園を会員に入れてくださるようお願いしました。



QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。

✉ a@ankei.jp

📄 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

32

安溪貴子・安溪遊地

干ばつの中での農作業

今年、ほとんど雨が降らないまま、六月二八日に梅雨明けを迎えました。一九五一年からの統計史上最短の一七日間の梅雨でした。その後もほとんど雨が降らず、約六八ヘクタールの水田を潤すはずの福谷（ふくたに）溜池（ためいけ）の水も、六月から二日おきに給水制限をしましたが、七月に入って、安溪大慧もメンバーである班長集会で、まとまった雨があるまでの給水停止が決定されました。二〇一二年七月末の土石流災害のために、溜池の改修工事が必要になって給水ができなかった年以来の、危機的な状況です。こうなると、慈雨を祈るしかないのですが、それでも、つばめ農園の農作業は待ったなしです。

五月二五日、阿東つばめ農園の営農ソーラーの下に大豆を播種しました。芽が出てくると、子育て中のキジバトたちが三〇羽ほど舞い降りてついばんでいます。鳥の忌避剤兼殺菌剤として、チウラムという農薬を豆の種子にまぶすのが一般的ですが、化学物質にたよらない阿東つばめ農園ではもちろん使いません。畑の全面に、鳥よけネットを張ることにしました。ソーラーパネルを支える架台の柱の間を縫うように張

るのですが、手間は普通の倍ほどかかります。暑さと乾燥に負けて、大豆の発芽率は一〇分の一以下でした。育ってきた数少ない苗を山側に集めて移植し、出荷せずにとつてあった予備の種子を谷側に再び蒔くことにしました。生えてきた草にトラクタをかけて、管理機という小さな耕運機で播種、発芽を確保するための、水路からの給水がかろうじて間に合いました。

一方で五枚の田んぼにはイセヒカリの田植えの作業が重なっています。それぞれ二回の代掻きのあと六月六日から田植え、六



営農ソーラーの下で大豆の除草をする
山口県立大学国際文化学部の学生たち

月一三日からは除草機で二四日まででそれぞれ除草を三回くりかえし、合計一五回の除草機かけをしました。乗用除草機では、どうしても機械がターンするところの苗が敷き潰されますので手で補植しながら手除草と続きます。その間に畦草刈りも必要です。七月ははじめから一週間は、遊地が胆石で入院というハプニングがあり、労働力が減る一方、八人の山口県立大学生が地域実習という科目でまる二日来てくれて、大豆の除草や畦草あつめなど、機械ではできない部分をカバーしてくれました。

宮本常一「抵抗の場としての地域社会」を読む

話は飛びますが、宮本常一先生は、本誌の五月号で紹介した平和憲法の生い立ちについてだけでなく、地域社会の住民の、政府や資本家の思想や行動に対する憤りが暗殺の形をとった大正昭和の歴史についても述べています（『朝日ジャーナル』昭和四八年一月一九日号、未来社の著作集第一五巻に再録。http://ankei.jp/yujv/?n=2594）。

ではなぜ地域社会は大切にしなければならぬのであるか。……明治末から大正へかけては地域社会のかがやかしい時代であ

った。地域住民は自主的で、そこに資本的蓄積によって銀行をおこし、その銀行を利用して自分たちの生活をゆたかにするために電車を通し汽車を走らせ、電灯会社を作り、製麺工場や紡績工場をおこし木工場もつくった。そしてそこに住む人たちの多くは株主としてこの事業に参加した。ただ経済的基礎が貧困であったために経済的変動に弱かったけれども、自己のえらんだ道を歩みつづけて来たといつていい。

しかし、戦争を一つの契機として中小銀行は統合され、小さい会社も合併をすすめられていった。と同時に地域住民の主體的な地域経営の意欲は消されていった。

地域社会の住民の、政府や資本家の思想や行動に対する憤りは暗殺という形で展開していった。原敬の暗殺から始まって、浜口雄幸、井上準之介、団琢磨の暗殺は現実も前途も暗くなりゆく農民社会の雄叫びのようなものではなかったのだろうか。しかもその暗さはなお続いている。ただ農以外の食料や産業が発達して、人びとがその方に転じてゆきははじめたことによって、戦前のように切羽つまったものは見えない。しかしそのことによって農村問題は解決されたのではなく、そのままのこされている。同時に農民たちの住む地域社会の問題もな

ら解決されてはいないのである。それは工場をたてて、地域住民の労力をそこに吸収させるといようなことだけでは解決するものではない。工場の資本が地元のものでない限りは工場自身もしょせん他所者であり、利潤は事業主体に吸収され、地元住民は工場の雇用者として隷属を強要されたにすぎない。瀬戸内海のごときも他所者資本の無責任さがそのような現象を生み出していったのである。いわば今日の開発は資本によって国内植民地をつくっていき、地域住民はこれに隷属せざるを得なくなりつつある。このことに対して住民の抵抗は当然起こつていい。だが地域住民に荷担するものは少ない。地域住民の抵抗がどのように困難なものであるかは水俣病患者たちの運動の中に読み取ることができる。

地域住民のために不幸をもたらす産業ならば、これを停止してよいという覚悟がなければヒューマニズムは確立されない。しかも多くの場合、事業そのものは災害、公害をよびおこすまでは決して根本的対策を考えないのが、政府、資本家共通して見られる態度ではなからうか。（つづく）

（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

a@ankei.jp

http://ankei.jp



QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。



つばめ農園おひさま便り

33

安溪貴子・安溪遊地

精霊蜻蛉と慈雨

お盆を迎えてイネも大豆も花を開きました。ヒエ取りに入った田んぼに、赤トンボの群れ。ひと目一〇〇匹ほども飛びかっています。精霊蜻蛉しやうりようとうんぼとも呼ばれるウスバキトンボの群でした。トンボも鳥たちもめつくり減ってしまったと感じることが多いここ数年にはなかった光景にしばらく見とれました。

農園は、お天気にほんろうされながら、イネや大豆、野菜の苗の移植に除草にと、休む暇のない毎日です。覚悟していた早ばつは幸い雨が降り、溜池も満杯となって、水路のたてる水音に安堵しています。

つばめ農園での稲作を始めた翌年の二〇一三年七月末に、集中豪雨によってあちこちの山が崩れて、田んぼが土砂に埋まったことがありました。急斜面にスギやヒノキを植えて、間伐もしないで放置された人工林が土石流のスタートになったことが見て取れます。手入れされない人工林は、もともとの広葉樹林にくらべて、土をつかまえる力が弱いのです。その後、大きな予算をかけていくつも砂防ダムが建設されましたが、広大な山が、地域の活力を生み出す仕掛けはないのでしょうか。

津和野町の木質ガス発電

山口市阿東徳佐のつばめ農園から車で二〇分ほどの島根県津和野町にちわの日原に日本ではまだ珍しい森林活用の先進事例があります。面積の九割までが森林の津和野町では、まず山の航空写真をとって、それをもとに所有者ごとの境界や、生えている木の種類などを把握しました。そして、総務省の地域おこし協力隊で毎年三人の若者を雇用して、森に送り込みはじめました。チェーンソーをもつのも初めての人たちが、重機を使って崩れにくい作業道をつくりながら、皆伐でない持続可能な「自伐型林業」の現場経験を積み重ねます。協力隊の三年間が終わった後は、なんと九割までが津和野町に定住。例えば「#津和野ヤモリーズ」というグループとして林業で生計を立てているのです。

現状ではほとんどお金にならない広葉樹も活かせる方法はないかと模索し、持続的に山を手入れして生きる夢を熱く語りつづけたのが、町の農林課長だった久保陸夫さんでした。材木としては出荷できない部分や樹種をチップにし、それをガス化して発電タービンを回し、固定価格買取制度を生かして発電するというアイデアにたどり着

いて計画をスタートしたのが一〇年ほど前
のことでした。

普通に考えれば、燃料としては、丸太ハ
薪ハチップハペレットハガスの順に、実際
に燃やすまでに余分な手間と経費がかかり
ます。また、蒸気タービンの火力発電所は
超大型でないと熱効率が低いし、発電所の
排熱をバイブラインで地域に給湯する北欧
のコジェネのモデルも、人口が希薄な中山
間地では使えそうにありません。

百聞は一見にしかず。二〇二二年八月上
旬、「中国山地百年会議」の勉強会で、定
年退職後は、日本でバイオマス発電を手掛
ける#フォレスト・エナジー社の社員とし
て奮闘中の久保さんを訪ねました。



久保睦夫さん（前列中央）を囲んでエネルギー
のEサインをする中国山地百年会議「エネル
ギー座」のメンバー

森の中の採石場あとの五〇アールほどの
平地に、材料のストックヤードとそれを碎
いてチップ化する津和野町出資の部分と、
四〇KWの発電機が一二基並ぶ民間部分が
置かれます。発電所の従業員は三人で回せ
るとのこと。以下は、勉強会での質疑応答
から。

問 ガス化のメリットとデメリットは？

答 人口規模に応じたごく小規模なフィ
ンランド製の発電機に出会って初めて可能
になりました。タールが出ないようにチッ
プの含水率を一五%まで乾燥させることが
ハードルでしたが、イギリス製のチップ乾
燥機で発電機からの一台一〇〇KWの排
熱をうまく活かすことができるようになり
ました。

問 なぜ一二基も並べるのですか？

答 定期メンテナンスが発電を休まずに
交代でできること、一二基で一七基分の
燃料チップを乾燥させる力があるので、同
じ発電機を温泉や役場や病院や老人ホーム
に追加で設置して、そうした拠点の電力と
暖房・給湯の両方を地域自給できるように
したいという拡張性の自由度が大きいから
です。

問 必要な燃料の量は？

答 材木の生の状態で年に六五〇〇トン
です。津和野町の業者からは四五〇〇トン、
県内の他地域から残りを仕入れることで、

安定供給をめざしています。

問 排ガス・廃棄物は？

答 排ガスは無色です。年間一二〇トン
ほどの#バイオ炭が出ますが、これは、町
内の耕地の土壌改良に使えます。さらに、
生物由来の炭素を土中に蓄えるので、二酸
化炭素削減の経産省のJクレジットとして
勘定されます。

発電機と同じ色の緑と白の一人乗り電気
自動車に乗ってさっそうと現れた久保さん
は、小さな取り組みだけれど、他の地域で
も真似てほしいとおもって挑戦している、
と語られました。現場では、バイオ炭に水
をかけるじょうろのような装置や、チップ
乾燥機からの温風を工場の外に導くダクト
などを手作りするなど、楽しい創意工夫を
つみ重ねておられました。

島根県立農林大学校には、有機農業のコ
ースがあります。持続可能性を求めて農地
を活かし、山を活かす島根県での取り組み
に負けないように、県境を越えて山口県側
でもおおいに学び、交流したいものだと思
っています。（つづく）
（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）



QRコードにスマホ
をかざすと、サイ
トが見られます。

 a@ankei.jp
 http://ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

34

安溪貴子・安溪遊地



「久しぶりね！」マルシエでハグしてもらおう
安溪大慧

マルシエでの出会い

台風が次々とやってきて、防風対策や、風で傾いた大豆の根本を踏みながら立てていくといった作業に追われながらも、枝豆をいただきはじめました。

無農薬で取り組んでいる農家の農産物や加工品を直接消費者にお届けする、オーガニック・マルシエ（有機の市）という集まりに、わたしたちが属している山口かんぼ研（山口県環境保全型農業推進研究会）としても加わることになり、つばめ農園の三人で五〇キロほど先の山口市小郡のお店

「#農家さんの台所」まででかけました。いつものイセヒカリと白大豆タマホマレの他にはじめて自家用野菜のお福分けを販売しました。山口県立大学の卒業生という方が家族で玄米をお買い上げくださり、直接出会って食べていただけの機会は大事だと痛感しました。種子交換会に興味をもつてくれたモモちゃんは、山口市仁保で一八歳から有機農業に取り組んで二年目。安溪大慧は、いつも畑についているいろいろ教えてくださる中村自然農園のお母さんから、久しぶりで懐かしいと、コロナ時代の「密着しないハグ」をしていたりしました。収入としては大したことはなくても、楽しい出会いのある大切な一日になりました。

地方自治の自殺・安倍元総理の県民葬

話は飛びますが、世論は反対に傾いて、それとともに内閣の支持率も下がり続けている。安倍元総理の国葬が強行される中で、山口県では一〇月に#県民葬をやるのだと発表されました。条例もないし、県民が総理を選んだわけでもないのに、なぜ？ 国をやることを真っ先に真似て、地方自治と地方分権の実があがらない山口県らしい発想です。県が実施したアンケートでも、住

民が情報公開を申請してみたら、実は賛成が二三、反対が二三七という状態でした。県民からの異議申し立ても相次いでいます。七月末に立ち上がった団体のひとつ「安倍元首相の国葬・県民葬に異議あり！山口県民の会」に、遊地は五人の共同代表のひとつとして参加しました。

県民葬のことは、なかなか全国には伝わっていませんでしたが、NHKの「おはよう日本」で全国放送され、九月一五日には、東京新聞が次のように報じてくれました。

「憲政史上最長の長きにわたり、重責を果たしてこられた。県政でも後押しをいただいた。地域振興策に支援いただき、懸案のインフラ整備も進んだ」。一二日の会見で、村岡知事は県民葬の意義をそう語った。開催の法的根拠については「地方自治法で、地方公共団体は地域における事務を処理すると定めている。県民葬もその中に含まれる」と主張する。

しかし、市民団体「安倍元首相の国葬・県民葬に異議あり！山口県民の会」事務局の坂本史子さんは「巨額のお金が伴うし、地方自治法を盾に何でもできると解釈するのはおかしい」と反発。インフラ整備に貢献したとの知事の発言にも「首相が地元へ便宜を図ったことになる。やっちゃいけないでしょ」とあきれられる。

同会共同代表の安溪遊地山口県立大名堂教授も「地方自治法は住民自治と地方分権に沿った行政運営を説き、住民の福祉の増進に努め、最少の経費で最大の効果を挙げるとうたっている。今回は法の趣旨に反しており、地方自治の破壊だ」と問題視する。沖縄大での勤務経験がある安溪氏。歴代五人の県知事のうち四人を県民葬とした沖縄との違いも感じている。「山口の計画は、県民に誇りを与えた知事をみんなで偲ぶ沖縄と別物だ」

沖縄国際大の佐藤学教授（政治学）は「沖縄ではどの県民葬にも異論は出なかった。知事公選制を勝ち取った歴史ゆえだ」とみる（以下略、記事の全文は <http://ankei.jp/yuji/?n=2597>）。

#地方自治法二条二項の「地域における事務」として、県知事は条例によらない独自の裁量で県民葬でもなんでもできるというのは独裁的な暴論です。同じ第二条の一二項には「地方公共団体に関する法令の規定は、地方自治の本旨に基づいて、かつ、国と地方公共団体との適切な役割分担を踏まえて、これを解釈し、及び運用するようにならなければならない」と書かれています。「地方自治の本旨」とは、憲法第九二条にある言葉で、地方公共団体を地方の住民の意思に基づいて運営する「住民自治」と「団

体自治」がその柱です。

政治学者の白井聡さんが『長期腐敗体制』（角川新書）で書いた「不正で、無能で、腐敗した政権」を長く牽引した政治家を、葬儀・旧統一教会葬・国葬・県民葬と何度でも葬儀をしたい方々がおられるのは事実です。しかし、半旗の掲揚や黙祷を強制したりすることは受け入れられません。

人間に貴賤はなく、生物にも優劣はありません。どうしても税金を使って追悼と顕彰をやるといふのなら、その日には、森友学園事件で公文書改ざんをさせられて自死に追い込まれた赤木俊夫さんや、アフガンに緑と平和をもたらして凶弾に倒れた中村哲医師、さらには、新基地建設のために辺野古で日々埋め立てられている海の生き物たち、岸田政権のもと、再び動き出しそうな上関原発予定地の生物多様性など、もっと先に光があたるべき存在があることを思い起こしたいものです。

（つづく）
（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。



 a@ankei.jp

 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

35

安溪貴子・安溪遊地

草との共存

一〇月上旬に農園のコンバインでの稲刈り、乾燥・もみ擦りをへて、美味しいお米がいただけました。今年はいせヒカリの原種を育てたので来年の「種もみ」のために、稲の種子の取り方を、あらためてお師匠さんに習いました。田での選抜、手刈り・はぜ掛けをして、ほぼ手作業でいねいに収穫します。一方、近隣の慣行農法の田は、初夏の水不足のために除草剤をうまく効かせられなかった田があり、ヒエよりもアメリカセンダングサ、クサネムをはじめとする雑草が目立ち、刈り取りをあきらめた田



リモコンで動く草刈り機を練習中の
安溪大慧

もありました。無農薬の稲作で毎年のように苦戦する雑草との種類の違いに驚くとともに、除草剤の働きをあらためて見た思いです。

つばめ農園のような棚田地帯では、のり面と呼ぶ斜面の草刈りが大きな負担になります。しかし、斜面に除草剤を使うと土手が崩れてしまいます。生かさず殺さずという除草剤というものも売られています。二〇一三年七月の大雨では、それを使っていた田のあぜがあちこちで崩落を起こしてしまいました。やはり、草刈りが必要なのですが、傾斜が四〇度近い長さ八メートルもある斜面を鋭い歯が回転する草刈り機を担いで歩くのは危険で、とくに夏場は重労働です。息子の大慧は、モアという重い機械を走らせてあぜの上の方から刈りますが、せいぜい上から一メートル半ぐらいしか届きません。中山間地の斜面の草刈りこそは、高齢化の中で耕作放棄につながる要因だということが実感されます。そこで、阿東つばめ農園では、あらたに自走式の草刈機を導入してみました。二〇〇万円もする充電式のハイテクのものなどいろいろ開発されているようですが、クローラーでの走行はバッテリーで、草刈り部分はガソリンエンジンという製品なら手が届きそうで

す。涼しいところからリモコンですぐいと草刈りが楽しめるようになるか、冬場の雪かきにもどの程度活躍してくれるかを農閑期によく練習してみたいと思っています。

ゲノム編集食品はいらない

九月一日に、山口市仁保で「子ども達の未来を考えるタネの食育講座」が開催されました。山口市で「エシカル給食の日」の実現のために活動している「やまぐち食育くらぶ」と「ヤッタネーやまぐち」が、「百年先、われらの未だ見ぬ子孫にも郷土の自然を伝えましょう」をテーマにして開催するというので、かけつけました。安深貴子に、まだ耳慣れない「ゲノム編集食品とは」というテーマで話してほしいというリクエストでしたので、勉強してお話をしました。約三〇人が参加した会で話題の全体を、#『長周新聞』が取材してくれました (<http://ankei.jp/yuji/?n=2599>)。以下はそのあらましです。

遺伝子組み換え技術は、ある生物が持つ遺伝子の特徴を別の生物に組み込むことです。例えば、害虫抵抗性のある遺伝子組み換え作物とは、BT農薬を生産する微生物

物の遺伝子を、トウモロコシやジャガイモに組み込ませる。すると、植物全体が、虫がそれを食べれば死ぬ毒をもつようになります。その作物を人間が食べるのです。この技術は、しかし、EUなどでは消費者から拒否されていますので、あらたにゲノム編集という技術が導入されました。これまでのようにやみくもに組み込んでいた違う生物の遺伝子ではなく、DNAの狙った場所の二本の鎖を切ってその機能を失わせるだけで外から遺伝子を持ち込まないので、安全だと宣伝されています。でも、切ったところに新たな遺伝子を入れることもされており、遺伝子を変えることは組み換えと本質的には変わりません。生物は、体の大きさのバランスをとる遺伝子が備わっていますが、その遺伝子を壊して、肉だけが肥大したマダイや食ベすぎで速く太るトラフグが実用化されています。ギャバという物質を多く含むトマトとあわせた三つが日本で販売されているゲノム編集食品なのです。

米国では、トランス脂肪酸を含まない安い植物油をということで、ゲノム編集大豆が作られました。これを発売した米国の会社は、株価が一五九分の一にも暴落してとうとう身売りするはめになってしま

ました（#印輪智哉さんのブログ <https://projectinyaku.net/archives/8302>）。

もともと生き物に備わったバランスをとる機能を担う遺伝子を壊すことの、それを食べる人間や、その他の生き物たちや環境への影響はわかっていません。それなのに、日本政府は、環境影響評価をおこなう義務、安全性審査を受ける義務、表示の義務を企業に対して免除したうえで、世界で三種類しか発売されていないゲノム編集食品（ギャバトマト・トラフグ・マダイ）を認可してしまつたのです。現在、企業はトラフグとマダイを、宮津市のふるさと納税の返礼品で、またギャバトマトを、二〇二二年に全国の福祉施設に、二〇二三年には学校に苗を無料配布する計画です。子どもたちを実験台にすることを止めようと、脱ゲノム編集食品の全国組織の#OKシードと連携して「やまぐちの種子を守る会」としての働きかけを始めたところです。（つづく）
（あんけいたかこ・あんけいゆうじ）

QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。



 a@ankei.jp

 <http://ankei.jp>



つばめ農園おひさま便り

36

安溪貴子・安溪遊地

土に生きる

山々の紅葉の色が日毎に鮮かになってきました。山裾を歩くと、ツリガネニンジンに似たサイヨウシャジンや、リンドウ、野生化したラッキョウの花が青紫で映えています。

つばめ農園もイセヒカリを無事収穫、新米の販売を始めています。収量は少ないのですが、今年は色彩選別にかけても、クズ米がほとんど出ず、美味しいお米ができました。一月中旬の農園では、サツマイモ基腐病をまぬがれた紅はるかへの収穫を終えて、大豆と蕎麦の収穫が間近です。

まる三年になったこの連載は、アフリカや日本の話題を渡り歩きながら、ほぼコロナ禍の中で進行しました。発行人の四方さんが、いろいろな市民の集会に出向いて、そこでの販売を大きな収入源としてきたこの雑誌『むすぶ』が、集会というものがほぼできなくなった中で存続していることは、ほとんど奇跡です。応援を続けたいと思います。

コロナ以前と変わらずにつばめ農園のお米や大豆を食べてくださるみなさんには、ぜひ一度農園をお訪ねくださるよう、お招きいたします。都会で消費者として暮ら

していても、ちょっとした農業体験が、将来少しずつでも自分で食べ物を育てるきっかけになるかもしれません。その小さな一歩を歩みだすことが、日本のように競争になれば真っ先に飢えるだろうといわれている国では大切なことと思われれます。また、お近くの方も、気軽にお訪ねください。先日も営農ソーラーの取材に来てくれた学生たちには、薪ストーブを焚く前に、体があたたまるように、まず薪割りをしてもらいました。ダイズの収穫に来てくれる八人の学生たちとは、のべ五日間の実習のしめくりのごほうびとして、国産小麦の薪焼きピザを自分たちで作って食べる予定です。

インドネシアの女性グループの訪問

一〇月のはじめ、山口市立山口情報芸術センター(ワイカム)のインドネシア人学芸員のバルトさんからメールが届きました。#バクダパンという、インドネシアの女性アーティストグループと「#食と倫理」についてのプロジェクトを準備中で、彼女らを山口に招くときに、阿東つばめ農園を訪問したいという要件でした。

同時に送られてきたプレゼンには、バク



インドネシアからのお客様を迎えて
(2022年10月)

タパンの紹介として「食ることが大好きな人たちの集まりです！食卓に並ぶものをきっかけに、社会生態学的課題について語り合い、議論し、批評し、食を通じてあらゆることを考えようとするグループです」とありました。食と倫理とアートという思いがけない組み合わせ。面白そうなので訪問をお引き受けしました。ところが、あの方を読んだら、彼女らの設問は、日本の植民地政策と農業政策の過去と現在に深く切り込むものでした。

a 日本統治時代の日本の食のプロバガンダがインドネシアの食糧政策に与えた影

響は何か？

b 日本統治時代の政治的文脈は、東南アジア、特にインドネシアの食糧政策にどのような影響を与えたか？

c 国内政策に対するプロバガンダは、日本社会とどのように関連していたのか？（戦時中の食糧に関する集合的記憶とそれが今日の状況にどのような影響を与えたかを調査し理解するために）

d 私たちが収集したこれらのアーカイブをどのように読み解き、現在の状況、特に現在のグローバルなフード・ポリティクスの状況に文脈づけることができるのか？山口に住む日本人のスタッフや友人も加わって、一〇人ほど来られましたので、新たな植民地になった台湾で日本稲を育てようとする努力の話を、#蓬萊米をめぐる末永仁^{めくむい} 技手と磯永吉博士の足取りを中心にお話しました。戦後、インドのパンジャブ地方の緑化に取り組んだ杉山龍丸さんの働きかけで、蓬萊米の種子二〇トン^にを中華民国政府がインドに送って、そこでも日本稲の栽培に成功し、台湾米の八割以上は現在も蓬萊米だという、植民地とその遺産の光と影をお話しました。

グローバル企業による在来の農業への圧迫にいかに向かうべきか、という質問

が次に出ました。この連載でもたびたび取り上げているように、ローカルフードを守りたい「種子を守る会」の全国や山口での取り組み、アフリカでの「緑の革命」の現状など、お話ししたいこともたくさんありましたが、座学では長くなりそうなので「土に触れれば、ここに希望があるという答えがわかるはずですよ」と、空き家を改装した「おひさま交流館」を出て、すぐ横の放棄水田跡で、特大のサツマイモを掘ってもらいました。

私たちが去年から参加している、総合地球環境学研究所のサンゴの島の水循環プロジェクトのフィールドは、奄美沖繩とベラウ共和国、そして、インドネシアのワカトビ諸島となっています。地球研は、地元の実践者との協同を柱とする「超学際研究」を重視していますので、今後の交流が楽しみです。

(つづく)
(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。



a@ankei.jp

http://ankei.jp



つばめ農園おひさま便り

37

安溪貴子・安溪遊地

少しずつ交流が復活

お正月はどのようなにお過ごしでしょうか。暖冬のなか、つばめ農園では、少しずつ交流が増え始めています。

光市室積海岸にある地域に開かれた#福祉メイキングスタジオ「うみべ」に、以前にご紹介した天地成行さんのご縁で、安溪大慧と遊地が遊びに行きました。まったりした空間にくつろいで、絵を見たり昼寝したり歌ったりトランプしたり…一日いても、ドリンクバー付きで三〇〇円。ここで知り合いになったウクレレ大好きな女性たちが、つばめ農園のおひさま交流館を四人で訪ねてくださいました。開園から一〇年、人工化学物質を使っていない、#阿東つばめ農園のお米のイセヒカリや、白大豆マホマレの味噌、とれたての野菜などを、ご自分たちで料理して試食。音楽でつながった仲間たちの楽しい遠足のようで、新米の白米と玄米、薪ストーブでの料理や、干し芋づくりの途中のふかし芋などを堪能していただきました。試食のあと新米のお買い上げとご予約をいただきました。年間を通じて予約をいただける方が増えてくると、つばめ農園の経営も安定して



きますから、交流を増やすことは大切な取り組みです。

「望年会」と称する、年中開催可能な名前の集まりも年末年始にあります。地元のお坊さんの呼びかけで始まった「船平山焚き火の会」、子どもたちに安心・安全な食をと願うお母さんたちの「ヤッターネ！やまぐち」のみなさん、山口かんぼ研（山口県環境保全型農業推進研究会）の総会を兼ねた集まりなどにも参加します。

山口かんぼ研ほか県内の有機農業団体の主催で、コロナ流行の中でも休まず開催してきた「#山口県環境保全型農業フォーラム」。今年は三二回目で、二〇二三年二月

光市の福祉メイキングスタジオ「うみべ」訪問。青い髪の前崎代表（右端）、画家オカピーと記念撮影（2022年11月）

二六日(日)に、新山口駅側のKDDI維新ホールで開催します。講師には、東京大学大学院教授で、二〇二二年に「食料安全保障推進財団」を立ち上げた鈴木宣弘さんをお迎えします。すでに始まっている食料危機の中で、経費ばかりが激増して収入は増えず、経営が行き詰まっている農家を助け、自給率を高めることの大切さについて話していただき、「農ある未来」へ向けた山口県各地の取り組みについても紹介しています。

「特技」は肩こり？

話は飛びますが、東アフリカの共通語であるスワヒリ語には「ミリマ ハイクター ニラキニ ビナダム フクターナ(山々は出会わないが、人はいつも出会う)」ということわざがあります。タンザニア西部、エヤシ湖畔のマンゴラ村に通っていた、文化人類学者の和崎洋一さんは、スワヒリ語⇨日本語辞書を作りました。ある時、フンデイ(特技・大工などのわざ)という単語の例文を集めようとして、村の誰かれの「フンデイは何？」と尋ねてまわりました。そうしたら「あいつのフンデイは肩こりだ」という返事と遭遇。「あれほど固く肩が凝

るやつはいなくて、誰も真似ができません」というのです。さあ、そうなる、フンデイを「特技」と訳してはどうにも収まりが悪い。「他人には真似ができないその人らしさ」が誰にもあって、その中に肩こりも入っていると考えられない(和崎洋一『スワヒリの世界にて』一九七七年、NHKブックス)。和崎さんの出会った東アフリカの社会では、金子みすゞさんの「みんなちがってみんないい」というよりも、スワヒリ語の「キラ ムトゥ ナムナ ヤケ(十人十色)」またはもつと積極的に「みんなちがってみんな変」という世界観があるんじゃないかなあ、と私たちは思いました。

マンゴラ村からもう少し西側のタンガンイカ湖畔に二年間住んで人類学のフィールドワークをした、掛谷誠・英子さんという先輩がいます。水辺から森のままでさまざまな環境で、何を育て、狩りや魚とりなどを加えてどのように暮らしを成り立たせているかの研究をしました。気づけば人々は、自分の集落にずっといるのではなく、友人を訪ねてあるき回り、そこに何か月も居候するし、またこちらも知人を居候させるという、もちつもたれつの暮らしをしていたのです。ある男が、ある年がなばって焼畑をたくさん開いて、多くの収穫をあげました。ところ

が居候たちが集まってきて長居して、結局いつもの年よりも早く食料を食べ尽くしてしまつて、彼の家族も、別のところへ居候にいくことになったとか。こういう社会では、ある家だけが豊かになるとか、威張るとかいうことは、絶対にできない仕掛けになっていたのですね。

全国統一の成績で人間を薄切りにして入る大学、会社や役所に入ったら報酬や出世を餌に追い立ててきた日本。明治以来の「富国」も「強兵」も国づくりの目標としては色あせてしまった今日、TEK(伝統的な生態学知識)とも呼ばれる世界の人々の暮らしの智慧に目を向けてみませんか。人類発祥の地の東アフリカには、人はどこまでも違っていることをそのまま認めながら、誰もが平等に生きることが保証する、そんな寛容な社会のあり方もあったのだということとを年頭にあたつて思いおこしてみました。

(あんけいたかこ・あんけいゆうじ)

(つづく)

QRコードにスマホをかざすと、各サイトが見られます。文中の#マークはパソコン検索用です。



 a@ankei.jp

 <http://ankei.jp>

種子交換会と種苗法	34
食品と暮らしの安全基金	3
女性たちの活躍	15
スワヒリ語	37
ソンゴラ語 (コンゴ民主)	12, 18
体験型ゲストハウス・マルゴト (上関町)	27
大学生の受け入れと農園実習	11
タンザニア	37
地域が学校	11
中国山地百年会議	13
長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会	27
津和野町の木質ガス化発電	33
「適密・適疎」をめざす	5
統合失調症の人たちと知り合う	24
中村自然農園と日向ぼっこの力	30
ナバラ自治州の風車 (スペイン)	22
日本の種子を守る会を山口でも	4
農業ボランティアの受け入れ	8
福祉メイキングスタジオ・うみべ	37
物々交換と労働交換	8
ペシャワール会と中村哲医師	29
ほほえみの郷トイトイ (阿東地福)	13
未来会議やまぐち (阿東徳佐)	5
みんなのつどえる新聞「みんつど」	24
ヤッタネ! やまぐち	7, 15, 35
山口県環境保全型農業フォーラム	28
山口県立大学	11
山口市情報芸術センター (YCAM)	36
やまぐち環保研 (山口県環境保全型農業 推進研究会)	1, 3, 28, 34, 37
やまぐち食育フォーラム	25
やまぐちの種子を守る会	35
有機給食	15, 28
有機の市	34
有機農業研究会	16
生物文化多様性研究所の活動	
原子力資料情報室 (Cnic)	28
生物文化多様性研究所の設立	12
生物文化データベース (コンゴ・西表島・ 与那国島)	12

世界保健機構 (WHO)	29
地球研 (総合地球環境学研究所)	17, 36
「抵抗の場としての地域社会」	32
日本アフリカ学会で発表	18
日本学術会議と学問の自由	12
八幡原のミヤマウメモドキ群落 (阿武町)	22
平和憲法と幣原喜重郎	30
蓬莱米 (台湾とインド)	21, 36
『榕樹文化』 (同人雑誌)	21

登場する主な人名 (敬称略)

磯永吉 (蓬莱米の父)	21, 36
うっきー (やまぐち食育クラブ)	7, 15, 35
うみべのオカピー (画家)	37
N 子 (与那国島)	12
オム・ユナ (映画マルモイの監督)	12
掛谷誠 (人類学者)	37
菌ちゃん先生 (吉田俊道)	26
國光美佳 (子どもの心と健康を守る会)	25
久保睦夫 (津和野町)	33
小若順一 (食品と暮らしの安全基金)	3
鮫田晋 (千葉県いすみ市職員)	28
しかたさとし (ロシナンテ社)	1
幣原喜重郎 (憲法 9 条)	30
渋沢敬三 (宮本常一を育てた人)	27, 30
末永仁 (めぐむ、蓬莱米の母)	21
杉山龍丸 (インド緑化運動)	36
鈴木宣弘 (食料安全保障推進財団)	37
高木仁三郎 (原子力資料情報室)	28
津野幸人 (農学者)	1, 28
テドロス (WHO 事務局長)	29
天地成行 (みんつど編集部)	24
中村哲 (医師、ペシャワール会)	29
中村進卓 (のぶたか、中村自然農園)	30
前島由美 (ゆめの森こども園)	25
宮本常一 (歩く学者)	27, 30, 32
ムクウェゲ (医師、コンゴ民主)	29
山田正彦 (日本の種子を守る会)	16, 30
吉松敬祐 (つばめ農園の師匠)	31
和崎洋一 (文化人類学者)	37

主な事項索引・人名索引（五十音順）

数字は連載番号

つばめ農園の暮らしと生き物たち

アオダイショウ	20
アフリカ料理	18
石臼で粉ひき	26
イセヒカリ	4, 31
一等米	4, 23
ウンカの大発生	10
オニフスベというキノコ	21
けものたちとのつきあい	9
麴づくり	36
国産小麦粉で薪のピザ	36
再生紙マルチ稲作	1
サツマイモ基腐病	30
色彩選別機	11, 23, 36
地の者になる道は	13
積雪 70センチ	14
種子どり	7
蕎麦	3, 26, 36
タマホマレ（甘い白大豆）	6
ツバメの子育て	20
手作り味噌	6, 12, 37
手作りロケットストーブ	23
鳥たちのいろいろ	18
鳥よけネット（大豆用）	32
トンボがもどってきた	33
二ホンミツバチの復活	3, 31
畑の除草	8
馬糞の活用	9
紅はるか（サツマイモの品種）	30
毎年が一年生	10
みんなちがってみんな変	37
麦踏み	2
リモコン草刈り機	35

おひさま発電所と地域のエネルギー

LNG 基地とハチの干潟の危機	22
環境エネルギー政策研究所 ISEP	17
市民エネルギーやまぐち（株）	2, 14

ソーラーシェアリング（営農ソーラー）	2
ソーラーシェアリングの雪害	14, 19
ソーラーシェアリングの再建	17, 19
大規模風力発電計画（阿武町）	22
出口がない原発の基本設計	1
木質ガス発電（津和野町）	33

地域の悩みごととは待ったなし

空き家の活用と交流	5
イージスミサイル基地（萩市）	22
遺伝子組み換え食品	6
上関原子力発電所建設計画	8, 22, 27
グリホサート（ラウンドアップ）	6
ゲノム編集食品	35
国葬・県民葬	34
種子法（主要農産物種子法）の廃止	4, 7
種苗法の改定	4, 7, 16
食の主権の回復	4
食料危機	23
食料自給率	28, 37
「沈黙の春」	3
天敵の激減	10
ネオニコチノイド農薬	9
農業競争力強化支援法	7
米価の暴落	23
ポストハーベスト農薬	3
みどりの食料システム戦略	16

おひさま交流館と地域交流・国際交流

アフガニスタンとペシャワール会	29
いすみ市の有機給食	28
インドネシアのアーティスト	36
エシカル給食の日（仁保小学校）	35
SL やまぐち号	20
おいでませ山口県 桜 NAVI	27
お金を介在させない知恵（上関町祝島）	8
上関の自然を守る会	8, 22, 27
子どもたちの受け入れ	26
コンゴ民主共和国と紛争鉱物	29
島根県立農林学校と有機農業	33

つばめ農園おひさま便り 中国山地に抱かれて

2023年1月1日 第1刷発行

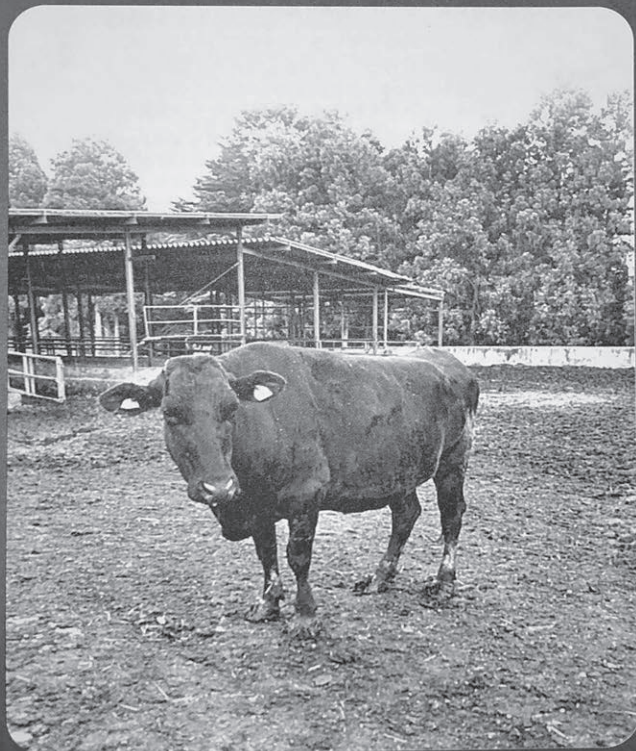
著者 安溪貴子・安溪遊地
編集協力 ロシナンテ社・四方哲
版下作成 日置真理子
写真提供 岡本公一
編集 阿東つばめ農園・生物文化多様性研究所
発行 阿東つばめ農園・生物文化多様性研究所
〒759-1512
山口市阿東徳佐中 1694-2
URL <http://ankei.jp> <http://ankei.blog.jp>
email a@ankei.jp

印刷・製本 プリントバック
©ANKEI, Takako & ANKEI Yuji 2023. Printed in Japan

No.617 (22.6)

月刊 **むすぶ** Keep9
—自治・ひと・くらし—

ロシナンテ社



被災地の今 お金という現実
↳ 本当の復興は原発事故の前にもどること、
同じ生活を送れること

コロナ禍の学校の悲惨

三年目のコロナ禍くらい大目にしろよ！無理無理！（上） 岡崎 勝

提携セミナー6. 農の近代化と環境汚染

アンベール・雨宮裕子



広告 この冊子の本文は、ロシナンテ社の『月刊むすぶ』の588～623号に連載されたものの複製です。上は最近の表紙の見本です。(ほかでは読めない、生活者の現場からのメッセージが満載で毎月届いて年間購読料は9000円。同価格でpdf配信も選べます。くわしくは、上のQRコードか、下のURLをごらんください。
<https://www9.big.or.jp/~musub/index2.html>